

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 21 号 (平成 29 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXI, 2017

Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について

後 藤 敏 文

Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について

後藤 敏文

以前 Mette 教授記念論集に Zur Sprache der Śvetāśvatara-Upaniṣad と題してドイツ語で発表した論文 (T. Gotō 2000) を基に、本邦各方面の研究者の利用を期待して、邦語版を著す。ここに扱われる言語事実の検証には仏典の言語研究に共通する事項が多々あり、活用を期待している。Śvetāśvatara-Upaniṣad [ŚvetUp] については、Th. OBERLIES が 1990 年代に一連の論文を発表し、便宜が与えられている (Th. OBERLIES 1988-1998)。¹

1. 8 音節から成る *brahmavādīno vadanti* の導入文の後、第 1 詩節はウパニシャッドの主題を、神学論争 (*brahmōdya*、ことばによる決闘) における問いの形で提示する：

I 1 *kiṃ kāraṇam brahma. kutaḥ sma jātā. | jīvāma kena. kva ca saṃpra-*
tiṣṭhāh. |
adhiṣṭhitāḥ kena sukhetareṣu | vartāmahe. brahmavido vyavasthām ||
原因² としての *brahmaṇ-*(と) は何か。何から、我々は生まれて [こ

¹ OBERLIES は、異読、修正、解釈、二次文献とともに詳細に論じている。ŚvetUp のテキストを論じたものには、TSUCHIDA 1985 がある。

² *iśaḥ kāraṇam* については、HOPKINS JAOS 22, 1901, 382 参照、例えば MBhār cr. ed. XIII 14, 100 *iśaḥ kāraṇakāraṇam*。 *kāraṇa-* の語にはシヴァ教における 5 原理 (*pañcārtha-*) の一つとしてのそれを理解すべきであろう、cf. BHANDARKAR 1913: §92。この問いに対する答えは VI 9c *sa kāraṇam* 「彼が原因である」に見ることができる。(名詞構文およびそのような論理構造を前提とする文要素においては、例えば、VI 13cd *eko ... yo ..., tat kāraṇam ... jñātvā* 「...である唯一の者、彼が原因であると理解した後」に見られるように、代名詞の主語が述語名詞の性数に合う「一致」(agreement, Kongruenz) の現象が現れるが、*sa kāraṇam* にはそれが見られないこ

こに] あるのか。

何を糧に我々は生きているのか。そして、どこに [我々は] そろって
確固たる基盤をおいているのか。

何 (誰) に監督されて, [我々は] 安楽な, またはそれとは別の³ 状況
に

あるのか。 *brahmaṇ-* を知っている者たちよ, 具体的事情を [語れ]。

sma は動詞 *as* の 1st pl. ind. として, triṣṭubh 詩行の cadence において *smaḥ* の代わりに用いられたものと判断される。この現象は, 1st du. *sva* (*svas* に代わって) とともに Epic Sanskrit [Ep.] に多く見られる。⁴

jīvāma も同様に, 第 2 語尾を示す。韻律上の要請から, (多用される

とに注意)。 *kiṃ kāraṇam* の「何の原因で, 何のために」という用法 (PW s. v. *kāraṇa-* 234 中央) はここには合わないであろう。

³ *itara-* は *anyā-* 「ほかの」, *pāra-* 「(さらに) 別の」と異なり, 対置される二つの事物, 事項の「他方」を意味する。ここでは, *sukhetara-* は, 韻律の制約により *sukhaduḥkheṣu* 「楽 (幸をもたらす) と苦 (苦しみをもたらす)」の諸状況の意味で用いられたものであろう。次節 *sukhaduḥkhaheṭoḥ* 「楽と苦の原因により」参照。「幸以外の」という解釈も可能。OBERLIES WZKS 39, 1995, 78 は, Cl., Ep. における *itara-* の複合語 (特に, CAPPPELLER ad Kirātārjunīya I 14) を参照し (n. 59), “in Glück und [allen] davon verschiedenen [Zuständen]” (幸運とそれとは別の [全ての] [諸状態]) と訳す。

⁴ 参照: Gorō Mat., 1990, 1005, および, 注 105 (: MBhār I 215, 19 *tat kartārau sva* 「それを, 我々二人はすることになろう」), 注 106 (*sma* MBhār III 67, 7, III 133, 7, VIII 49, 116, I 71* 第 1 行, III App. No. 6 第 117 行, XIII 8* 第 8 行); およびその補遺: Mat., 1997, 1046 (: MBhār I 16, 28, III 279, 9 [Sāvitrī III 9]), および, ŚvetUp 当該箇所); HOLTZMANN 1884, 18f., 22 (ad WHITNEY §548, §636); RENOU Gramm. sansc., ²1961, 401f. (Lit. あり); VAN DAALEN Vālmiki's Skt., 1980, 81f.; SEN JOIB I, 1951-1952, 126; SIL IL 19, 1958, 53; BROCKINGTON JOIB 19, 1969, 6。さらに, 2 次語尾由来の *as* の MIA 1st pl. 形, Pāli *asmā*, *amhā* (例外的に *asmase*, *amhāse* も。GEIGER §141.1); Māgadhī *sma*, Māhārāṣṭrī, Śaurasenī *mha* (Ardhamāgadhī *mo*, *mu*, Māhārāṣṭrī *mho*, Jaina-Māhārāṣṭrī *mo* と並んで, cf. PISCHEL §498); 一般に, MIA の 1st pl. 語形, Pāli °(*ā*)*ma*, BHS °(*ā*)*ma*/°(*ā*)*maḥ*, (Pkt. °(*ā*)*mo*) 参照。

に至っていた) 1st pl. 形 *sma* に倣って用いられたものであろう。⁵

*sampratiṣṭhāḥ*⁶ を OBERLIES は *sampratiṣṭhā-* の pl. 形ととる: “und wo sind unsere Grundlagen [= Wurzeln]” (「そして、どこに我々の基礎があるのか」)。しかし、複数の基礎が考えられているのではなく、皆に共通の唯一の根拠が求められているのである。⁷ 形容詞 *pratiṣṭhā-* 「しっかりと基礎、根拠に立っている」(Br.+) を考えるべきであろう、例えば、BĀU-M VI 2, 14 (-K VI 1, 14) *yād vā ahām pratiṣṭhāsmi tvām tāt pratiṣṭhō 'si* 「私が根拠であるから、君は、それ故に、根拠をもっている」。 *sam-prati-ṣṭha-* は他に確認されないかもしれないが、⁸ *sām* は何時でも「完全に」または「一緒に、共通に」の意味で語の意味を強めたり変化させることができる: 「そして、どこに [我々は] 完全に (または: そろって) 確固たる基盤をおいているのか」。

vyavasthām (acc.) には解釈の余地がある。様々な見解については、OBERLIES ad loc. (WZKS 39, 78f. と注) 参照。 *brahmōdya-* 「ブラフマンにつ

⁵ Ṛgveda [RV] の場合には、injunctive がこのような一般記述に用いられ得るが (HOFFMANN Inj., 1967, 119ff.), そもそも inj. を作らない *as* には該当しない, cf. Gorō Coloq. Delbr., 1997, 189 n. 94. — MBhār には、第 2 語尾による *sma* と *carāma* によって、Jagatī の Upajāti タイプにおける第 3 音節の短を確保する例が見られる: *cyutāḥ sma rājyād vanavāsam āsritās¹ carāma dharmam niyatās tapasvinah* 「王権より外れて、園林住まいに我々は依っている。我々は、苦行者の節制された生活法を過ごしている」(Sāvitrī 物語 III 9ab = cr. ed. III 279, 9ab)。

⁶ Ed. Ānandāśr. Skt. Ser. の注では、2 写本 *ṣṭhā* (daṇḍa を入れる編集以前の続き書きが反映しているに過ぎないと思われる)。

⁷ 例えば、BĀU IV 1 では、*ākāśa-* 「空間」が *brāhmaṇ-* の唯一の *pratiṣṭhā-* 「根拠を置く場」とされ、複数あるその *āyātana-* 「持ち場」に對置される。

⁸ *sam-prati-ṣṭhā* からの動詞形も少ない。PW s. v. は唯一 MBhār の箇所を挙げ、使役語幹 (causative) に、ChU, MBhār, Bhāgavata-Purāṇa から各 1 箇所を挙げるのみである。同所は “partic. *ṣṭhita*” の項目下に、MBhār 等と並んで、ŚvetUp の問題となっている箇所を挙げるが、誤解でなければ別の解釈によるものと思われる。BÖHTLINGK 1891, 91f. は *pra-tiṣṭhāmah* と修正を試みている。

いての討論、論争」という文脈を考慮すれば、上掲の訳が妥当と思われる。*vyavasthā*-「個々の様態、具体的状況」は、この文脈では、事実上、解答の具体的中味 (*vyākaraṇa*⁹) を謂うことになろう。¹⁰

2. *sma* と *jivāma* に続き、動詞に関する問題を検討する。

2.1. *īśate* が *īś* 「支配する、意のままにできる」の現在語幹 3rd sg. ind. 形として、3箇所、都合5回用いられている: I 10b; III 1ab, III 2b; V 1d。このような thematic (-a 語幹) の語形は他に一切見られない。通常の 3rd sg. 形は RV から古典 Skt. に至るまで *īśe*¹¹ または *īṣṭe*¹² である。ŚvetUp には *īṣṭe* は見られず、*īśe* は現れる。しかし、HAUSCHILD 62f. が確認しているように、IV 13cd は RV X 121. 3cd (Hiraṇyagarbha の歌) と同一であり、¹³ VI

⁹ CARDONA Pāṇini, ²1997, 568 参照。仏典に見られる *vyākaraṇa*-「授記」、*avyākṛta*-「無記」をも参照。

¹⁰ 例えば、Rāmāyaṇa II cd. ed. App. I No. 27 第 18 行 (Ed. GORRESIO II 116, 36) *iti nāsti vyavasthāsmiṃ¹ kvedaṃ saṃtiṣṭhate jagat* 「というわけで、これ (以下の問い) については、確定 (具体的、確実な見解) は無い: 『どこに、この世界は終わるのか』」参照。Inhaltsakkusativ (中味の acc.) による解釈、「我々ブラフマンを知る者たちは、個々の状況として存在している」は迂遠であろう。

¹¹ *īśe*: RV (多数), Kh, AV, YS^m, YS^p (次注参照), TĀ III 11. 6^m, AB-KB-GopB (= TS II 1, 6, 3, VI 5, 7, 2 *savitā vai prasavānām īśe*), JB, TB, AĀ, JUB, Patañjali, MBhār, Cl. ŚvetUp については、本文下記。

¹² *īṣṭe*: RV V 87, 3 (補遺的讃歌), MS IV 8, 1^p: 107, 12 (1. sg. *īśe*, 2nd sg. *īśiṣe* に後続。平行箇所 KS XXX 1: 182, 3 は 1st sg., 2nd sg. 形による文をもたず、*īśe* のみ。MS^p では、3rd sg. *īśe* は I 5, 9: 78, 1, I 6, 8: 99, 13. 14. ⁺I 9, 5: 136, 5, III 7, 9: 88, 5 に見られる), ŚB-ŚBK (多数。 *īśe* は無し), ChU, Gautama-DharmaSūtra, KṣudraSūtra, Bṛhaddevatā, Patañjali, Cl. — *īśate* RV X 43, 3 は接続法 (subjunctive, Konjunktiv), cf. HOFFMANN Inj., 1967, 65. subj. は、さらに、*īśātai* (hypercharakterisiert) JB, 1. sg. *īśai*, 2. sg. *īśāsai* (hypercharakt.) KS-KpS^p に見られる。語根 *īś* の現在形については、Gorō Coloq. Delbr., 1997, 184 参照。

¹³ Pāda a-b は独立の行。a には (擬) 古形 *devānām* (4 音節 /*devānaam*/) が現れる。第 IV 章には、RV などの古いテキストからの引用、模倣がかなり多く見られる (OBERLIES WZKS 32 56f.). 独自の詩節にも (擬) 古形が現れる、上記 *de-*

17c (→ 2.2.3.) はそれに倣ったものである。どちらの箇所においても、「支配する」対象は、通常通り、genitive で表されている。*īstate* の場合には acc. が用いられており、このような例は、PW によれば、ŚvetUp の当該例の他には Īśā-Upaniṣad に対する Śaṅkara 注から一例が知られるのみである。

I 10b *kṣarātmanāv īstate deva ekah* 「滅するもの (原材料 prakṛti) とアートマン (puruṣa) とを唯一の神は支配する」。

V 1d *vidyāvidye īstate yas tu so'nyah* 「知と知らざるものとを支配している者、それは、しかし、別の者である」。

III 1ab *ya eko jālavān īsata īsanībhiḥ¹ sarvāml lokān īsata īsanībhiḥ* 「唯一者として、網を備え、支配力たちによって支配している者、世界中の者たちを支配力たちによって支配している者」; — III 2b *ya imāml lokān īsata īsanībhiḥ* 「これら世界中の者たちを支配力たちによって支配している者」 (→ 2.2.3., 注 16)。

īstate は、5 箇所いずれにおいても 4 乃至 5 音節の opening に続く “break” - - を形成している。従って、韻律上強いられたその場限りの語形 (Kunstabildung) とも考えられる。また、始めにどこか 1 箇所 で用いられ、それがさらに模倣された可能性もある。しかし、異例の acc. 支配を考え合わせると、単なる韻律上の制約には帰し難い。名詞 *īśá-* 「支配者、主」を強く意識して、「支配者、支配する神として何かを支配、指揮、主宰、差配する」というような特別な意味が込められている可能性がある。¹⁴

vānām の他、IV 4d *bhuvanāni viśvā* || (n. pl.), IV 12c *paśyata* (おそらく RV の inj. をまねたもの、→ 注 32, 5.6. 末)。— OBERLIES ad IV 19 (WZKS 42, 90) は VS (および TĀ) からの引用であることへの言及を欠く; WZKS 32, 57 には正しく指摘されている。

¹⁴ ŚB の両伝本同様 (→ 注 12), ŚvetUp には 3. sg. に *īse* が知られていなかったとすれば (IV 13, VI 17 のそれは別の言語層に由来する), *īste* に代わって, *īstate* を

2.2. ŚvetUp には、語根 *īś* から作られた多くの語形が用いられており、¹⁵ の中には、他に用例の知られない語形も含まれる: *īśanī-* (→ 2.2.3.), *īśana-* (同), *īśita-* (→ 2.2.1.)。さらに、*īśitar-* (→ 2.2.2.) も僅かな用例を見るに過ぎない。

2.2.1. *īśita-*: ŚvetUp VI 2c は *īś* の verbal adjective が確認される唯一の箇所である: *teneśitam karma vivartate ha* 「彼に支配されて行為は展開するのだ」。

2.2.2. *īśitar-*: VI 9ab *na tasya kaś cit patir asti loke¹ na ceśitā naiva ca tasya līngam* 「その者の主人は、世に、誰もいない。そして、支配する者は無く、その徴表もありはしない」。PW, pw によれば、*īśitṛtva-* の語が Jaiminiyanyāyamālavistara (14 世紀) に対する注釈書に知られている。さらに、Patañjali の Mahābhāṣya に、文法学上の語形として、*īśitā* が *īśitum* とともに挙げられている。

2.2.3. *īśanī-* は次の箇所に知られるのみである:¹⁶ III 1ab *ya eko¹⁷ jālavān īśata īśanibhiḥ¹ sarvāml lokān īśata īśanibhiḥ* 「唯一者として、網を備え、

用いることによって、このウパニシャッドにおいて特別な意味をもつ語根 *īś* の語形を保持すべく努めたと考えられるかも知れない。また、*īś* からの動詞形が、この時代にはそもそも用いられなくなっていた可能性もある。Pali 語には、文法学書に *īśati* が見られるのみである (CPD s. v.)。

¹⁵ 無論、神 Śiva の存在を背景とする。それ故、*bhavabhūta-* VI 5c は「Bhava となった、神 Bhava として我々の前に現前している」と解される。OBERLIES ad loc. (WZKS 42, 113 および n. 231) は PW に従い、“durch den das All geworden ist” (その者によって、宇宙が生じたところの) と解す。Bhava, Śarva としての Rudra-Śiva は、例えば、AVP II 20, 2, AV VI 93, 2 に見られる (cf. PW V 220f: f)。

¹⁶ 諸種の出版 (および写本, cf. OBERLIES ad loc.) は *īśata īśanibhiḥ* の読みを支持する。Bibl. Ind. 版は III 1a *īśita īśinibhiḥ*, 1b *īśita īśanibhiḥ*, 2b *īśata īśinibhiḥ* とし、HAUSCHILD はこれらに基づいて、一貫して *īśata īśinibhiḥ* を採る。

¹⁷ *ya eko* が 2 音節である問題については、→ 5.1.3。

支配力たちによって支配している¹⁸ 者, 世界中の者たちを支配力たちによって支配している者」, 同様に, III 2b *ya imām*¹⁹ *lokān iśata iśanībhiḥ* 「これら世界中の者たちを支配力たちによって支配している者」。 *iśanī-* の語によって, Śiva 神の *śakti-*, あるいは, その前駆をなすものが考えられていると思われる。しかし, 語形成は類例のないものである。OBERLIES ad loc. (WZKS 40, 138 n. 79) は *iśana-* の女性形とし, “die durch Herrschen charakterisierte [Kraft]” (支配権を特色とする [力]) と解す。しかし, *iśana-* 自体が ŚvetUp VI 17 にのみ知られる語である: (cd) *ya iśe asya jagato nityam eva*¹ *nānyo hetur vidyata iśanāya* 「彼, ...この世界を, まさしく常に支配しているところの。他に, 支配へ向けて, 原因は見いだされない」 (a → 5. 4. 4.)。この Pāda d は 15d (= III 8d) *na anyah pañthā vidyate 'yanāya* 「別の道は, 行くために見いだされない」を模したものと推測され, *iśana-* の語の実在性 (Sprachwirklichkeit) は疑わしい。 *iśanī-* は, 従って, その場限りの語形 (Kunstabildung) と判断される。 *iśāna-* 「(何かを) 意のままにする, 支配している」から作られた稀な女性実体詞 *iśānī-* (PW によれば, Mārkaṇḍeyapurāṇa 中の Śākta テキストである Devimāhātmya 以降用例あり) から, 韻律上の要請により縮められたものかとも思われる。²⁰

¹⁸ *iśate* はここでは絶対用法 (absoluter Gebrauch)。

¹⁹ *ya imām* は韻律上 *y' imām, yemām*, または *ya-imām* と 2 音節に読まれる (cf. 5. 1. 2.—5. 1. 3.)。行頭の長 (—) が 2 つの短 (◡) で置きされる resolution (Auflösung) の想定も可能 (EDGERTON JAOS 59, 1939, 170f. および下記注 29 に挙げる文献参照)。

²⁰ 例えば, GEIGER §32. 2, EDGERTON JAOS 66, 1946, 205: §72 参照。その前提とされる *iśānī-* は, *Rudrā-* に対する *Rudrānī-*, *Īndra-* に対する *Indrānī-*, *Vāruṇa-* に対する *Varuṇānī-* の意味で, *iśā-* 「支配者」に対して 「支配者 (Śiva) の妻」の意味で作られたとも考えられる。 *iśā-* は ŚB, MNārUp, ŚvetUp, Mantra-Brāhmaṇa (*iśāneśa-*), Ep., Cl. に在証される。 *iśā-* 「権力」 AV, YS^m, Br. をも参照。さらなる可能性としては, *iśinībhiḥ* からの dissimilation (*iśin-* とその派生語 *iśitā-*, *iśitva-* Ep., Cl. [ManSmṛ など], Pur. 参照), *iśānā-* または *iśā-* との混交 (contamination) も考えられる。 — ŚvetUp に現れる例外的語形としては, さらに, 他に見られない *uttarātara-* III 10a が挙げられる。比較できる語形成については, AiG II-2 598, 605 参照, 例えば, *pārātara-* 「より後の」。

2.2.4. *iśānīśau* 「支配する者と支配しない者と」 I 9a (cadence)²¹ (→ 5.3., 訳は 5.4.6.) には, *iś-* と *an-iś-* の複合語の可能性が考えられる。しかし, 語幹 *iś-* は事実上存在しない²² ので, ここでも, *iśānibhiḥ* の場合のように, *iśānīśa-* (*iśa-*+*anīśa-*) から, 人工的に作られた語形と考えるべきであろう: - - - - > - ー - - (→ 5.1.1.). *iśānīśa-* の場合には, 特殊な sandhi を想定しう: EDGERTON BHS Gramm. 33: §4.21: “final *a* is lost before initial *a* (compounds included), chiefly in verses, m. c., very often” (さらに, §§4.10, 4.11, 4.20), GEIGER §67, §69, H. JACOBI, IF 31, 1913, 213, 217 = Kl. Schr. 91, 95: “ā + ā zu ā”。Buddh. Hybr. Skt. の例としては, *anantatulya-* < *ananta-atulya-* Sukhāvativyūha, Ed. FUJITA 146, Ed. ASHIKAGA 7, 5, Ed. MÜLLER-NANJŌ 7, 10, *atulyananta-* < *atulya-ananta-* 同 470, 22, 7 乃至 23, 3, *casti* < *ca asti* 同 151, 7, 15 乃至 7, 20 が挙げられる。さらに, *'stiha* < *asti iha* 同 149, 7, 11 乃至 7, 16 (阪本, 1996, 65), pāli Jātaka の Mātrāchandas による偈から, SAKAMOTO-Goto Thèse Paris III, 1982, 32: §1.1. 参照。同様の現象は I 6d の “break” にも想定することは可能である: *juṣṭas tatas tenāmṛtatvam eti* (/tenāmṛ/ または /ten' amṛ/) 「すると, 彼によって嘉された者として, 雁(ひと)は不死性に行く(至る)」。これによって, break に - ー ー が得られるが, - - ー もあり得ないものか, さらなる検証が必要と思われる。注 29 末をも参照。

2.2.5. 語根 *iś* から作られた語には, さらに, *iśa-* I 8b, III 7d.20d, V 3c, VI 6c (*bhageśa-*), VI 7d (*bhuvaneśa-*), VI 16c (*guṇeśa-*), VI 17a (*iśasamstha-*: 5.4.4.); *an-iśa-* I 2d, I 8c, I 9a (→ 2.2.4.), IV 7c; *iśvara-* VI 7a, *maheśvara-* (METTE BEI 15, 1997 [1999], 166f. 参照), IV 10b, VI 7a, *aiśvarya-* I 11d; *iśāna-* III 12d.17c,

²¹ Ed. Wāsudew Laxmaṇ Shāstrī PAṆŚIKAR, Nirṇaya-Sāgar ⁴1932, ²1983 は *iśānīśau*。

²² *iś-* は, 他には Īśā-Upaniṣad 冒頭の意義不詳の詩節 (= VS XL 1) に知られるのみである: *iśāvāsyām idāṃ sārvaṃ* 「この一切は支配者によって住まわれるべきである」(?)。もっとも, *iśvarā-* (Kh, AV, YSP, Br.+) の語は, 接尾辞 *-van-* によって拡張された語根名詞 **iś-van-* を経て作られた形容詞と見なすことができ (Gorō StII 20 = Fs. Thieme, 1996, 94f. n. 15; 同 Morphology, 2013, 34 参照), *iś-* の存在を示唆する可能性がある。

III 15 (=Puruṣasūkta RV X 90, 2) が見られる。

2.3. *vedate* (V 6) は逸脱形である:

*tad vedaghyopaniṣatsu gūdhām¹ tad brahmā vedate brahmayonim. |
ye pūrvam devā ṛṣayaś ca tad vidus¹ te tanmayā amṛtā vai babhūvuh. ||*
その、ヴェーダの秘密の [教え] であるウパニシャッドたちの中に隠
されているもの、
それを、ブラフマン神はブラフマンの母胎であると知っている (ある
いは: 告げる)。
以前、それを知っていた神々とリシたち、
彼らは、それから成り立っている²³。[彼らは] 不死になったのだ。

b 行を *tad brahmā veda te brahmayonim [vidur]* と、*veda* と *te* とに分
けて読むことも考えられるが、「それをブラフマン神は知っている」は意
味をなさないのであろう。²⁴ *vedⁱ/vidⁱ* の thematic の形としては、iptv. 2. sg.
veda MBhār cr. ed. III 65, 32 (v. l. *vettha, viddhi*) が知られる程度である。
Nirṇaya-Sāgar 本 (ed. W. L. Shāstrī PAṆŚĪKAR, ³1925, ⁴1932, ²1983) は *vedayate* の
読みをもち、「告げる」を意味するとすれば、内容上よりふさわしい。²⁵

²³ RAU “die sind seines Wesens”, OBERLIES “die sind seines (=Śivas/Rudras) Wesens [geworden]”. *tanmaya-* は VI 17a にも現れる、→ 5.4.4. および注 74。

²⁴ ŚvetUp における *veda* および *vedⁱ/vidⁱ* の語形については HAUSCHILD 62 参照。

²⁵ *vedāya-^{te}* は「自らに知らしむ、気づかせる」から、(1)「感知する、感受する」BĀU III 2, 9; (2)「認める」PrasUp IV 10, 11, MuṇḍUp I 2, 10, ManSmṛ XII 13; 「ひとに自分のことを知らしめる」から、(3)「告知する、教える」BĀU IV 2, 4, ChU VIII 7, 3, PrasUp V 7, *pra-* とともに TaittUp I 5, の意味で用いられる。SAKAMOTO-GORO Fs. Deleu, 1993, 266 参照。—— MuṇḍUp には、*pravedayanti* と *vedayante* が (2) の意味で、近接した場所に現れる: I 2, 9-10 *avidyāyām bahudhā vartamānā vayam kṛtārthā ity abhimanyanti bālāḥ | yat karmaṇo na pravedayanti rāgāt¹ tenātūrāḥ kṣīṇalokās cyavante || iṣṭāpūrtaṃ manyamānā varīṣṭhaṃ¹ nānyac chreyo vedayante pramūḍhāḥ | nākasya pṛṣṭhe te sukṛte 'nubhūtvā¹ imam lokam*

従って、*vedate* が *vedayate* に由来する可能性が示唆される。²⁶ Buddh. Hybr. Skt. には、実際、“*vedati* ‘experiences, feels’ = *vedayati*, Pāli *vedeti*” (EDGERTON BHS Gramm. 190: §38.28, 230 s. v.) が記録されている。基になった *vedāya*^{te} 「気づく、知覚する、感受する」については、注 25、意味 (1) 参照。語幹 *veda-* は、従って、MIA のある段階で、*-eti* (< *-ayati*) と *-ati* が併存する動詞に倣って二次的に作られた (Rückbildung)、あるいは、*-ayati* > *-āti* > (m. c.) *-ati* の縮約 (contraction) を経てもたらされた (GEIGER §27, PISCHEL §149 参照) 可能性が高い。態 (Diathese) については、必ずしも重きを置く必要は無かろう。逸脱形 *bhavate* II 14d (2. 6.), MuṇḍUp の *pravedayanti* と *vedayante* の併存 (→ 注 25) を参照。ただし、出発点となったヴェーダ語形が、あくまで Med. *vedāya*^{te} であることには注意すべきかもしれない。

同置を意味する名詞構文 (あるいは、論理的にそれを前提とする構文) において、主語が代名詞の場合には、その性数は述語名詞の性数に一致する現象が見られる (agreement, Kongruenz)。²⁷ しかし、*tad brahmā vedate*

hinataram vā viśanti 「知らざるものの上に多様に転じつつ、愚か者たちは『我々は目的を達した』』と思ひなす。もし、行為をなす者たちが、欲情故に、はっきりと気づかないならば (絶対用法)、そのことに苛まれて、[天界の] 世界が尽きると、外れ出る (天界から落ちる)。祭式と布施の効力を最も広範なものと思ひ、混迷した者たちは、より良い他のものに気づかない。善行からなる天穹の背において、[彼らの祭式と布施の効力に応じたものを] 経験した後、この世界に、あるいは、より劣った [世界] に、入り込む」 (参照: WINDISCH B's Geburt, 1908, 30, Bhagavad-Gītā IX 21.24; 不正規形 act. *pravedayanti*, *abhimanyanti*, および, abs. *anubhūtvā* は SALOMON WZKS 25, 1981, 97f. No. 27, 35 に収録されている)。

²⁶ *vedate* はあまりにも異例であり、単純にこの *lectio difficilior* を *vedayate* に修正することは躊躇われる。*vedayate* を受け容れれば、caesura (yati) の無い *tri-ṣṭubh* の行が得られる。*vedate* の場合、“unterzählige Zeile” (1 音節不足の行) の例外的な形が考えられる。“unterzählig” の行は III 4b = IV 12b (TSUCHIDA 467 参照), V 3c (同 465), IV 4b に見られる。しかし、*b_arahmā* と読む可能性がより高い。PISCHEL §132, Pāñjabī *barahmaṇ* 「婆羅門」 (TURNER No. 9325), さらに、2. 5. 2., 2. 5. 3. に引く MuṇḍUp の例を参照。

²⁷ 例えば, SPEIJER Skt. Synt., 1886, 18; DELBRÜCK Ai. Synt., 1888, 90, 565; 同 Vergl.

brahmayonim の場合, *tad* の性数は *yonī-* のそれ (I 2b では明瞭に *m.*) に一致していない。n. *brahmaṇ-* の語が文中に直接現れないため, その性を明示しておく必要があるためかと思われる。

2.4. *pūrvam*, *agre* + 現在形

2.4.1. 同じ詩節の V 6c *pūrvam* ... *vidur* も注目される。完了形 (perfect) *veda*, *vidur* は現在の意味で用いられるため, 「以前, それを知っていた」と, 過去を意味するならば, 過去の繰り返しを謂う ind. pres. + *purā* または *sma* の構文が思い合わされる (*prāha* MuṇḍUp I 1.2 について, 2.5.2. 参照)。²⁸ 同じことは VI 18 *vidadhāti*, *prahīnoti* + *pūrvam* にも該当する:

*yo vai brahmānam vidadhāti pūrvam*¹ *yo vai vedāṃś ca prahīnoti tasmai* |

*taṃ ha devam ātmabuddhiprakāśam*¹ *mumuksur vai śaraṇam ahaṃ*²⁹

Synt. III, 1900, 240; KIEHNLE *ukṣ.*, 1979, 45f.; さらに, BRERETON IJ 31, 1988, 8f. n. 10 に Lit. あり。

²⁸ DELBRÜCK *Ai. Synt.* 278, HOFFMANN *Aufs.* II 528f. 参照。 *purā* + Aor. は確認 (Konstatierung, statement) に用いられる。 *Ai. Synt.* 286 の挙げる例を参照。さらに, Pāṇini III 2, 122。 *Aśoka* 王碑文においては, *purā* ... *ārabhiṣu* 「以前は捕まえていた (屠殺していた)」 (*Gīrnār* I 9 と平行箇所, BLOCH p. 92) が過去形 (Aor.) を用いて, 今日 (*aja*) に対置されている。 — RV I 30, 9 *huvé tuvipratīṃ nāram* | *yām te pūrvam pitā huvé* は「... 私は, 強力に抗う男に呼び懸ける, 以前, 君の父が (または: 私が君の父として) 呼び懸けたところの」にも, *pūrvam* による同様の用法が想定できるが, 同所の意味は明瞭でない。 II 37, 2 *yām u pūrvam āhve tām*¹ *idām huve* ... 「私が, また, かつて呼び懸けたところの彼に, 今ここに, 私は呼び懸ける」参照。 *Goṭō Coloq. Delbr.*, 1997, 181 n. 58, *huvé* の語形については, 同 *I. Präs.*, 1987, 348f. 参照 (元来, 動作に添えて述べる [Koinzidenzfall] ために用いられた *a*-Aor. の inj. であるが, 部分的に ind. pres. と再解釈された)。 [*purā* + ind. pres. の構文には, 「これまで (は) ... してきた, して (きて) いる, してきたものだ」という意味が強いように思われ, 材料を集めてきたが, 別の言及の機会に待ちたい。]

praṇādye. ||

ブラフマン神を、かつて、配備した(創った)者、
諸ヴェーダを、そして、彼のために送り遣った者、
アートマンのもっている統覚作用を照らし発動させるその神に、即ち、
解放を求めつつ、避難所として、私は身を投げ出すのだ。³⁰

これらの場合、ind. pres.+*pūrvam* には「繰り返し」という意味要素はなく、かつての行為を述べるものと考えられる。³¹

2.4.2. V 2cd *agre ... bibharti* にも同様の事情が看守される: *ṛṣiṃ prasū-taṃ kapilam yas tam agre¹ jñānair bibharti jāyamānaṃ ca paśyēt*³² 「リシと

²⁹ 韻律上、*śaraṇāhaṃ* (**śaraṇa ahaṃ* を経て、GEIGER §71.2.a, CPD s. v. *ahaṃ* 参照。例えば、*kathāhaṃ* < *kathaṃ ahaṃ*)、または、*'haṃ* (EDGERTON BHS Gramm. §20.7: nach -m, PISCHEL §417: pkt. *haṃ/ahaṃ* 参照)。*ahaṃ* を採用する場合には、*śaraṇam-a^o* の部分に、caesura の後の resolution (Auflösung) ¹ < ¹ - . . . が想定される。EDGERTON Kuppuswami Comm. Vol., 1936, 40, 同 JAOS 59, 1939, 168f., H. SMITH Sadd. IV, 1949, 1148: §8, WARDER 1967, 208, 210, 215 参照。ただし、ŚvetUp ではこの現象は必ずしも自明ではない、注 19, 45 参照。OBERLIES は I 6d *juṣṭas tatas tenāmṛtatvam eti* に /*tenāmṛtatvam*/ を想定し、¹ - が ¹ - . . . の価値で用いられているとする解釈を提示するが、resolution (Auflösung) は行頭と caesura の直後にのみ知られる現象である。→ 2.2.4. 末、注 19。

³⁰ *taṃ devaṃ śaraṇam praṇādye* は、acc.+*śaraṇam gam* 「避難所として誰かのものに行く、誰かの庇護に頼る」と、acc.+*pra-pad* 「誰かの足下に身を投げ出す、誰か/何かにすがる」(Rāmānuja における *praṇādye*- “surrender to God” BHANDARKAR 1913, 76ff.) の両構文が交叉した結果と思われる。

³¹ *sma* + pres. ind. は、ヴェーダ語より後には、「繰り返し」という意味要素を欠く場合にも屢々用いられるように思われる。Buddh. Hybr. Skt. *viharati sma* (2.4.3.) 参照。*sma* については、MUMM IJDL 1, 2004, 19-68 参照。

³² III 4c *hiranyagarbhaṃ janayāmāsa pūrvam*, IV 12c *hiranyagarbhaṃ paśyata jāyamānaṃ* (→ 注 13) 参照。— *jāyamāna-* によって、誕生までの期間が意図されていれば、この箇所は Jātaka-a I 51, 下から 1 行目 *bodhisattaṃ ca antokucchigataṃ vipṣasanne maṇiratane āvutaṇḍusuttaṃ viya paṣṣati* 「そして、お腹の中にいる Bodhisatta を [Bodhisatta の母は] 透き通った宝珠の中に通された白っぽい糸

して生まれた³³ カピラ、彼を太初において、諸々の識別力によって養っている／いた、そして、[彼が] 生まれてくるところを見ることができた(見ていたはずの)者」。

bibharti を、ここでは、一応、「扶養する」と訳したが、³⁴ OBERLIES ad loc. (WZKS 42 95f., 特に n. 123) が解するように、「[お腹の中で] 運ぶ、身籠もっている」の可能性がある。³⁵ *prasūtam* は、この場合、結果を謂うもの (resultative) と解される。過去の事柄を表現する特別な optative は存在しないので、*paśyet* は、過去という枠組が設定されている文脈中で、過去の願望、可能性 (および、それらから展開した用法: 規定、推量など) を表現する通常の表現である; → 2.5.1.。

2.4.3. 過去の叙述の枠組みにおけるこの様な ind. pres. の使用は、口語的

を [見る] ように見る」を想起させる。これについては、JB III 74: 1 *maṇau maṇisūtram pariḍṣyeta*, JUB I 18(4, 4), 8 *maṇau maṇisūtram pariḍṣyeta* 参照。誕生時点であれば、RV X 95, 7 *sām asmiṅ jāyamāna āsata gnāḥ* 「[Purūravas が] 生まれるとき、[神々の] 后たちがそろって座っていた」参照。

³³ 「Ṛṣi へと、Ṛṣi の資格を公認された」という意味で、*savⁱ/sū* 「鼓舞する、権限を与える」に帰することも可能。

³⁴ 例えば、*bibhṛhi mā* 「私を養え」 ŚB I 8, 1, 2, II 3, 4, 7, *bibhṛhy eva no maghavan* JB I 185: 3, さらに、JAMISON Rav. Hyenas, 1991, 124 参照。アーリヤ社会において、要請が単純な命令形 (imperative) で表明されねばならない背景には、一種の勇気試しの風習が考えられる。さらに、*ādhihi bhos tām agnīm* 「学べ、貴殿、その火を」 ŚB X 3, 3, 5, *adhīhi bhagavas* ChU VII 1, 1 など (Gorō Mat. 1-3, 1002 n. 86); *anu mā śādhi* 「私に教えよ」 JB II 55: 9, *ānu mā śāsta* ŚB I 5, 1, 26 など (Gorō StII 20, 1996, 103 n. 56); *brūhi* 「言え」 JUB IV 11(4, 23), 6, *anubrūhi* GṛSū. (Baudhāyana-Gṛhyasūtra II 5, 39 など)。

³⁵ 入門式 (upanayana, upāyana) に際して、師匠が入門者 (ここでは Kapila) を身籠もり、学生は 3 夜 (3 日) の後生まれるとされることは、この文脈に合う。AV XI 5, 3, ŚB XI 5, 4, 12, GṛSū. 参照。—— 「身籠もっている」については、例えば、*gārbhaṃ mātā ... bibharti* RV X 27, 16 など、KÜNZLE MSS 45, 1985, 156ff. を参照のこと。あるいは、RV X 69, 10 *pīteva putrām abibhar upāsthe¹ tvām agne vadhryaśvāḥ saparyān* 「父が息子をののように、Vadhryaśva は君を、Agni よ、膝の上に保っていた、大切にしながら」のような事例が参照できるかも知れない。

語りの実態を反映したものであろう。よく知られている Pāli の Sutta の出だしが想起される: *evam me sutam. ekaṃ samayaṃ bhagavā ...* (地名, 例えば *sāvattthiyam*) *viharati* 「そのように, 私は聞いた。³⁶ ある時, 世尊は (Sāvattthī に) 滞在している / いた」; *tena kho pana samayena* 「その [同じ] 時, 他方, ... のだ」。³⁷ *ekaṃ samayaṃ* に指示される過去の事柄が ind. pres. によって述べられることは, *sutam* の後ろに文の切れ目があることを指示する。Buddh. Hybr. Skt. の対応文では, *evam mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān (śrāvastyāṃ) viharati sma* とあり, *sma* の付加 (注 31 参照) は, Pāli に見られるような文を再解釈して, *samaye* の後ろに文の切れ目を移したことに起因すると考えれば理解できる。³⁸

2.5. 過去の事柄に用いられる願望法 (optative)

2.5.1. opt. *paśyēt* V 2d (2.4.2.) の解釈について, OBERLIES は F. O. SCHRADER OLZ 34, 1931, 887 = Kl. Schr. 170 の見解に従い, 現在における習慣的行為を見ているが,³⁹ むしろ, 過去の事柄に用いられる optative を想定すべきである。⁴⁰ この用法は, 可能性の (potential) opt. を, 話者自身

³⁶ 「私によって聞かれた」。gen. *me* は verbal adjective *sutam* (*śrutam*) の agent を示すもので, 名詞構文本来の格支配を残したものであろう。古インドアーリヤ語 (ヴェーダ, サンスクリット) では殆どの場合, 動詞構文の instrumental によって置き換えられている。Buddh. Hybr. Skt. *mayā śrutam*。

³⁷ SAKAMOTO-GOTO *dṛś et paś*, 1989, 398 と n. 5 参照。

³⁸ O. v. HINÜBER Kasussynt., 1968, 84-87: §72, BROUGH BSOAS 13, 1950, 416-426 (= Coll. Pap. 63-73), 舟山徹 「『如是我聞』か『如是我聞一時』か」, 2007 参照。

³⁹ SCHRADER “gewohnheitsmäßige Handlung”, OBERLIES 訳: “der den als Ṛṣi geborenen Kapila zu Beginn (jeder Schöpfung) mit Wissen (in sich) trägt und zuschaut, wie dieser geboren wird”。

⁴⁰ PISCHEL Grammar §466; HERTEL Muṇḍaka-Up., 1924, 35f. (: MuṇḍUp I 1, 2 *pravadedeta*, MaitriUp V 2, 71 [おそらく, V 2 *syāt* を意図]); EDGERTON BHS Gramm., 1953, 160f.: §32.85ff.; SALOMON WZKS 25, 1981, 98f. (: MuṇḍUp I 1, 2 *pravadedeta*, I 2, 12 *adhigacchet*. Lit. あり); SATYA VRAT Rāmāyaṇa, 1964, 236 (: *hanyāt* Rāmāyaṇa cr. ed. I 2, 27); — HOFFMANN Aufs. II, 1976, 605-619 (: YAv., OPers. に見られる, 過去の繰

が経験できなかつた過去の事柄について、推量、婉曲の意味で用い、口語で遠慮を込めて表明することに起源するとも解釈できる。しかし、出発点は、単に、古(・中期)インドアーリヤ語が過去の話法(modi: opt., subj. など)を表現する手段を欠いていたことに求めるべきであろう。過去の出来事について、可能性、推量、願望、意思などを表すための文法カテゴリーをもたないため、動詞の完了形、時を示す他の手段(2.4.)などによって過去の事象が明示されている枠組の中で、単純に、現在語幹の optative が使用されたものと考えられる。

2.5.2. MuṇḍUp 冒頭の opt. **pravadeta** は同じ問題領域に属する: I 1, 1-

*brahmā devānām prathamah sambabhūva¹ viśvasya kartā bhuvanasya
goptā. |*

*sa brahmavidyām sarvavidyāpratiṣṭhām¹ atharvāya jyeṣṭhapatrāya
prāha. ||1||*

*atharvaṇe yām **pravadeta** brahmā-¹ atharvā tāṃ pūrovācā-¹ āṅgīre
b_(a)rahmavidyām.¹ sa —*

*bhāradvājāya satyavahāya **prāha**¹*

bhāradvājō 'āṅgīrase parāvarām. ||2||⁴¹

śaunako ha vai mahāśālo 'āṅgīrasaṃ vidhivad upasannaḥ papraccha ...

Brahmaṇ 神が神々の中で最初に発生した、

あらゆるものの作者、事物の護り手として。

り返しを表す augment 付きの opt. 形。中期イラン諸方言に関する研究文献 605); SZEMERÉNYI Kratylos 28, 1983, 76 (Lit.), TEDESCO apud COWGILL Fs. Kuiper, 1968, 29 n. 16; インド・イラン語における過去の opt. (±augment) について、さらに、KELLENS Verbe av., 1984, 309: §4.4., §4.4.1; GHARĪB Fs. Klingenschmitt, 2005; SAKAMOTO-GOTŌ Ét. Kellens, 2009 (RV IV 18, 6 perf. opt. *mamṛdyur*, Mv I 108, 6 augm. opt. *adhyābhāse* などについても); KÜMMEL Perf. 2000, 374 (: *mamṛdyur*)などを参照。さらに、KONOW NTS 9, 1938, 231-239 “Future forms denoting past time in Sanskrit and Prakrit”。

⁴¹ 韻律による分節は試みに過ぎない。次の第3節は散文で書かれている。

彼は brahmaṇ に関する知識を全知識の基礎として
 最年長の息子 Atharva(n)に公言する／した。||
 Atharvaṇ に Brahmaṇ 神が公に議論する／したはずの
 brahmaṇ に関する [当の] 知識を, Atharvaṇ は, かつて,
 Āṅgira(s) (または: Āṅgira, Āṅgir) に語った。— [その] 彼は,
 Bhāradvāja (Bharadvāja の子) Satyavāha に公言する／した,
 Bhāradvāja は Āṅgiras に, 高次・身近の [知識]⁴² を。||
 大きな [学] 舎をもつ Śaunaka は Āṅgiras に, 儀規通りに控え待つ
 て, 尋ねた。...

語りには, 一貫して完了形 (perf.) が用いられている: 韻文中 *saṃ-*
babhūva, (*purā+*) *uvāca*; 散文中 *ha ... paṅraccha*。これに *prāha* と *pra-*
vadeta とが混じる。perf. *prāha* は, 通常, 現在の価値で用いられる (同様
 の事情は *vidur* [→ 2.4.1.] に見られる)。⁴³ 副文中の *pravadeta* は過去の出来
 事に関わり, かつ, 推量の機能が想定される。

2.5.3. opt. *adhigacchet* が第2の MuṇḍUp 成立因縁譚に見られる⁴⁴: I 2,
 12

⁴² つまり, brahmavidyā を全て。あるいは, 「遠い [昔] から最近までの (伝えられてきた) [知識]」とも。-ām に終わる様態の副詞「上から下まで, 完全に」または「順次, 伝授して」の可能性もある。

⁴³ RV より後の時代の標準は: 「現在」は *bravī/brū* の pres. 語幹 (*brāvīti, ābravit, brūyāt, brūhī*) または *ah* の perf. (*āha*, 他に, *āhūr, āttha, āhatur* のみ, cf. Pāṇini III 4, 84) :: 他の「時制」など (perf., aor., fut., pass., caus., v.adj. nom.deriv., etc.) は *vac/uc* から (*uvāca, āvocat, vakṣyāti, ucyāte, uktā, vāc-, vākā-, vākya-, etc.*)。AiG II-1 16 (Lit. あり), GIPPERT MSS 44, 1985, 32 参照。KÜMMEL Perf., 2000, 115 は, *ah* の perf. 形が Veda 文献では常に「現在」の意味で用いられることを確認している (Veda 散文については, 既に DELBRÜCK Ai. Synt. 297)。SPEIJER Skt. Synt., 1886, 250 は後の Skt. 文献について, “the latter [*āha*] may also be used of the past” と述べる。

⁴⁴ SALOMON WZKS 25, 1981, 99 No. 37.

*parikṣya lokān karmacitān bārāhmaṇo¹ nirvedam āyān. nāsty akṛtaḥ
kṛtena. |*

*tadvijñānārtham sa gurum⁴⁵ evābhigacchet¹ samitpāṇiḥ śrotriyaṃ brah-
maniṣṭham. ||*

世の者たちが行為（業）を貯めているのを見て取って、婆羅門は無感覚（茫然自失）に至った：「行為によって作られていない者は無い」。そのことを理解するために、彼はほかならぬ師匠のもとに行く／行ったのであろう、
焚き木を手にして、学識ある最上の婆羅門のもとに。

文頭（＝行頭）に置かれた *tadvijñānārtham* 「そのことを理解するために」が過去時への制約の役割を果たし、opt. *adhigacchet* に、過去の出来事に対する推量の機能が帰せられるかと思われる。

2.6. ŚvetUp II 14 では、*bhavate* と *sudhānta-*、および *tadvā* (→ 3.) が異例である：

*yathaiṅva bimbaṃ mṛdayopaliṭṭam¹ tejomayaṃ bhrājate tat sudhāntam |
tadvātmatattvaṃ prasamiṅksya dehi¹ ekaḥ kṛtārtho bhavate vītaśokaḥ. ||*

まさしく、泥で塗り付けられた像が
光熱からなるものとして、それがよく溶かされると、輝くように、
そのように、肉体によって制約された [ātman] は、ātman の実相をはっきり捉えると、
目的を果たした、唯一者となる、憂いが去って。

OBERLIES WZKS 40, 1996, 134f. が指摘するように、鑄造の過程が考えら

⁴⁵ *sa gurume*^o の部分に、caesura 直後の resolution (Auflösung: - → 。。) による¹ 。。。 - (かつ、Überzählichkeit, つまり、opening 5+break 3) が想定される。注 28 参照。

れている。*sudhānta*⁴⁶ は Buddh. Hybr. Skt. *nirdhānta*-「溶かし出された」のように, Pāli *suddhanta*-に見られる **su-dhanta*- から hypersanskritisation によってもたらされたと思われる。SAKAMOTO-GOTO MSS 44, 1985, 174-180 参照。⁴⁷ *bhavate* については, T. Gotō I. Prās. 229 n. 492。語幹 *mṛd-* (RV+) の異形 *mṛdā-* は他には知られていないようである。⁴⁸

bimba- の意味確定は難しい。⁴⁹ 最古の用例は, おそらく, Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa III (1), 5, 6 *yathā bimbena mṛgam ānayet* 「*bimba*- (囀の像) によって, 野生動物 (レイヨウ) を誘き寄せるように」。Vaikhānasa-Gṛhyasūtra IV 11: 64, 9.12 では, (Viṣṇu の) 「像」の意味で, *deva*- の語と並んで用いられている。従って, OBERLIES “(Metall-)Figur” が妥当と思われる。OBERLIES は蠟型による鑄造法を想定しており (“mittels des *cire-perdue*-Gußverfahrens gefertigt wurde”), その過程で, 土を塗られ, 包まれた像が, 肉体の中にある *ātman* に比されていると考えられる。

この解釈は更なる分析を導く。ŚvetUp 第 II 章は, 諸 Yajurveda-Saṁhitā が Agnicayana (大規模火壇設置祭) 用に収録する冒頭の 5 mantra をもって始まり, その各 mantra は語根 *yuj* から作られた語形で始まる。

⁴⁶ Edition によっては, 注釈に倣って, *sudhauta*-「よく洗われた」に修正する。

⁴⁷ Pāli *dhanta*-, *sandhanta*-, *niddhanta*-, Jaina-Pkt. *dhanta*-, *niddhanta*- (屢々 *dhoya*- [skt. *dhautā*-] 「洗浄された」と並出), Buddh. Hybr. Skt. *nirdhānta*-, — cf. *krāmati* :: *krāntā*- = *dhāmati* :: *x*. *suddhanta*-は, *suggati*-が *duggati*-に, *dukha*-が *sukha*-に合わせて作られたように, 平均化された形である。*suddha*- (*śuddhā*-) 「浄らかにされた, 純粋な」の影響も考えられる。同論文 176 参照。*dhmā* (*dham*ⁱ) の古インドアーリヤ語における verb.adj. は *dhmātā*- (それ自体は二次的) である (同論文 171)。

⁴⁸ 韻律上の要請とともに, *prakticism* が明らか。例えば, KUIPER IJ 1, 1957, 155 参照: *dīs*- :: pāli, pkt. *disā*- (Ep. には *disā*- も), *vāc*- :: *vācā*-, *vāā*- (*vācā*- は Cl., Ep. にも)。

⁴⁹ 精練の過程における 「[金属の] 塊」のようなものが考えられている可能性もある。SAKAMOTO-GOTO が扱う箇所は殆ど全て 「精練」に関わる。その場合には, PW s. v. 2) “*Kugel, Halbkugel, Scheibe* überh.; (am Körper) *rund hervorstehende Theile*” (「球, 半球, 盤」一般。「丸く突き出た」身体「部位」), 特に, “*einer Wolke Megh. 48*” (雲の, Meghadūta 48) 参照。

ŚvetUp と Agnicayana との関連は、OBERLIES WZKS 32, 1988, 35-62 によって指摘されている。この大規模祭式では、黄金製の人形 (*hiranyāya-pūruṣa-*) が用いられ、5層の煉瓦からなる火壇の最下層の中央部に置かれる。人形は祭主 (*yajamāna*) と等置され、天界における死後の祭主自身を象徴する (T. Gorō Centenaire Renou, 1996, 79f.)。従って、ここに語られる *bimba-* 「像, 似姿」は、具体的には Agnicayana に用いられる黄金の *pūruṣa-* を指すものと考えられる。

3. II 14c 冒頭の *tadvātmatattvam* の解釈は I 13d *tadvobhayam* の解釈と関わる:

vahner yathā yonigatasya mūrtir¹ na dṛśyate naiva ca liṅganāśaḥ |
sa bhūya evendhanayoniḡṛhyas¹ tadvobhayam vai praṇavena dehe. ||
 火の [場合], 母胎 (火鑽台の窪み, *devayoni-*) にあるときの姿は、
 見られず、しかも [その] 微細身が消滅することも無く、
 それは、何度でも点火用の母胎から得られるように、
 そのように、両者⁵⁰ は, *praṇava (om)* によって、肉体の中に [得られる] のだ。

II 14c *tadvātmatattvam* においては, *tad v ātmatattvam* 「そのように, また」とも解釈できるが,⁵¹ I 13d には妥当しない。可能性としては, *tad vai* から所謂 double sandhi を経た結果, あるいは *tad(-)vā* という語または語結合が考えられる。しかし, *yāthā* 文を受ける副詞 *tād* は知られていない。⁵² 従って, *tadvā* という語または結合自体が「そのように」という語義を担うものと考えられる。さらに, *vā* は *iva* 「ように, あたかも」に

⁵⁰ OBERLIES は “Gott und Seele”, RAU は “Gott und *prakṛti*” と解す。OBERLIES WZKS 39, 1995, 92 n. 145 参照。

⁵¹ HAUSCHILD, R. M. SMITH JOIB 24, 1974-1975, 325 はそのように解す。さらに, 注 56 参照。

⁵² DELBRÜCK Ai. Synt. 595, MINARD Subordination, 1936, 91 参照。

由来する可能性がある。この語は、RVにおいて既に1音節で現れることが多い、GRASSMANN S. V., AiG I 316f., 333 参照。つまり、*i*va または *i*va⁵³ のような実現が期待され、これから Pāli, Buddh. Hybr. Skt. の *va*, ないし、1音節語によく見かけられる長音化によって *vā* が導かれる (*vā* 「あるいは」への連想も考えられる)。PW s. v. *vā*, 3) “=*iva*”, 用例は Pāraskara-Gr̥hyasūtra, Ep., Cl.; EDGERTON BHS Dic. s. v. *vā* (*iva* または *eva* の意味で。“not in Pāli, but in AMg.”) 参照。ただし、*tad iva* という結合そのものは見出されないようである。*tad vā* 「あるいはそのように」が口語において、「いわばそのように」のような意味に展開した可能性もある。⁵⁴ *tadvat* 「そのように」(Ep., Cl., Pur.)⁵⁵ から MIA の語末に見られる展開 (例えば, *samyāk* 「正しく」> Pāli *sammā*) を経て *tadvā* に至った可能性も考えられよう。⁵⁶

⁵³ HOFFMANN (授業において) は、**i*va (*yv* については、Pāli *yvāyaṃ*, *yvāhaṃ* < *yo ayam*, *yo aham* など、GEIGER §71c, Buddh. Hybr. Skt. *yvāgu-* < *yavāgū-* Bhikṣuṇī-Vinaya 参照) から **i*va (metathesis; Pāli *evaṃ byā kho ahaṃ* に見られる *byā*; GEIGER §66.1. 参照), さらに、svarabhakti によって Pāli *viya* が生じたとする。PISCHEL Grammar §143 末, §336f. が挙げる諸形をも参照。III 9c (→ 5.1.2.), VI 10a (→ 5.6.) の場合をも参照のこと。

⁵⁴ *yāthā vā*, *yā- vā* 「(あるいは) 同様に」等については、SCHRAPPEL *iva*, 1970, 25ff. 参照。

⁵⁵ BÖHTLINGK 1901, 10 は II 14c のテキストを、注釈に倣って *tadvat sa tattvam* と修正を試みる。

⁵⁶ ただし、MIA 自体にはこれに該当する語は見出されない。もし、RAU ad V 4b が提案する修正 “*yadvānaḍvān* vgl. 1, 13d und 2, 14c” が正しいとするならば (訳 “wie der Zugochse [d. h. der Sonnengott]” p. 38; cf. OBERLIES ad loc. [WZKS 42 99f.] *yad* + *vā an*), ここでも、*yadvā* 「あたかも...ように」が想定されるかも知れない。しかし、テキストはあくまで *yad u* 「また、もし」であり、韻律上も内容的にもより相応しい: *sarvā diśa ūrdhvam adhaś ca tiryak*¹ *prakāṣayan bhrājate yad v anaḍvān | evaṃ sa devo bhagavān vareṇyo*¹ *yonisvabhāvān adhitiṣṭhat*^v *ekaḥ*¹ 「全方位、上にも下にも横にも照らしながら、また、彼が牽き牛として輝くとき、このように、彼は、好ましい (選ばれるべき) 神、尊き者である。[彼は] 唯一者として、[諸々の] 母胎の本性 (または: 母胎たちと本性たち) を監視する」。^v *ekaḥ* については、下記 5.1.1. 参照。—— [pw が古典期の Skt. に登録する *tad-anu* 「それに続いて」も語法の展開に関連するかも知れない。さらに、*utā im anannamur* MS-TS-AB^m ~

4. II 17c *ya oṣadhīṣu yo vanaspatiṣu* の cadence は *vanaspatiṣu* と読まれるべきである。⁵⁷ 従って、*-i* 語幹に Buddh. Hybr. Skt. に見られるような韻律上のヴァリエーション *-iṣu* (EDGERTON BHS Gramm. 83: §10.208) が想定される。Pāli では *-iṣu* が普通で (GEIGER §82.4), *-isu* は、むしろ、韻律上のヴァリエーションである (§83.8); Pkt. では *-iṣu* 両形併存 (PISCHEL §377, §381); さらに, AiG III 163 参照。 *oṣadhīṣu* に惹かれることも、常に起こりえたであろう。

4.1. II 11b *sphaṭikaśaśinām* には問題がある:

nīhāradhūmārkānilānalānām¹ | khadyotavidyutsphaṭikaśaśinām |
etāni rūpāṇi pūraḥsarāṇi¹ | brahmaṇy abhiviyaktikarāṇi yoge. ||

霧, 煙, 光線, 風, 火の,

螢, 稻妻, 水晶, 月の,

これらの姿は, brahmaṇ においては先駆けたちであり,

yoga においては開明を為すものたちである。

大多数の edition は *sphaṭikaśaśinām* を採る。Ed. PAṆŚIKAR (Nirṇa-Sāgar ³1925, ⁴1932) は *sphaṭikāśaninām*; 同 ²1983, Ed. Bibl. Ind. および Ānandāśrama Skt. Ser. の 1 写本 (OBERLIES によれば Raṅgarāmānuja 注付 Venkateswara Or. Ser. 54, 1955 も) *sphaṭikaśaśinām*。OBERLIES は, m. Pāli *phalika-* (OIA *sphaṭika-*) と並んで現れる Pāli f. *phalikā-* を引き合いに, *sphaṭikāśaśinām* と改め, 正規の cadence を確保している。複合語前肢の語末に見られる母音の延長 (SAKAMOTO-GOTO Thèse 1982, 24: §1.4.a に Pāli Jātaka に現れる *mātrāchandas* からの用例多数が挙げられている) も考えられる。*-in-* 語幹の gen.

utēva namnamur ŚB III 9, 3, 31^m ~ KB^m のような交代現象も考慮されるべきであろう。]

⁵⁷ break の形は (◌¹)-◌ または *yō* (EDGERTON BHS Gramm. §3.74, §8.19) と読めば, (◌¹)◌◌◌。 — ŚvetUp 第 II 章は caesura (¹) について自由度が高い。36 Pāda 中, 9 Pāda が caesura をもたないか, 外れた位置にもつ (25%)。第 V 章は 4:44 (9%); I, III, IV, VI では 1-3.6% の間である。

pl. °inām は EDGERTON BHS Gramm. 82: §10.201 (RENOU Gramm. scr. 333: §238 には Ep., Pur., Inschr. の例が挙がる), または MIA の活用形に従って理解される。瞑想, 神経集中の際に現れる現象⁵⁸ としては, śaśin-「月」の代わりに, 「稲光」の意味で aśani-「雷電, 落雷」も考えられるであろう (+sphatikāśaninām, cf. Ed. PAṆŚIKAR)。例えば, BĀU-M II 3, 10 (-K II 3, 6) には sakṛdvidyuttam 「一度の雷光」が puruṣa-ātman の姿 (puruṣasya rūpām) として描かれる。この場合, °inām は OIA としては正規形である。

5. 音韻上の形態確定が, 特に ŚvetUp のようなテキストでは, 韻律の分析と密接に関わることはよく知られている。これに関する幾つかの観察結果を注記する。

5.1.1. *adhitiṣṭhaty ekaḥ* I 3d, IV 11a = V 2a, V 4d (→ 注 56), V 5c, および, *tiṣṭhaty ekaḥ* III 9c (= MNārUp, 下記) において, cadence に現れる *ty* は 1 子音の価値を示す。即ち, *ti* > *ty* の sandhi を経ず, °*ti e* から, 母音脱落 (elision)⁵⁹ によって °*at' ekaḥ* (OBERLIES はこの形を直接テキストに採用) となったものと考えられる。----- > - 0 - - - については, → 2.2.3. 末, 2.2.4.。

5.1.2. I 2b *puruṣa iti cintyaḥ* は, 韻律上, 0 0 - 0 - - | の位置にある。ŚvetUp に, MIA, 就中 Buddh. Hybr. Skt. (EDGERTON BHS Gramm. §4.14) に見られる現象が多く観察されることから, 実際の発音は *puruṣo 'ti* であつたと思われる。同様に, III 9c (= MNārUp VARENNE No. 226, TĀ X 10, 3) *vrkṣa iva stabdho divi tiṣṭhat' ekaḥ* においては, elision または 1 音節の *iva* (→ 3., 注 53) による *vrkṣo 'va* の読みが想定される。*tantunābho 'va* VI 10a については, → 5.6.。もつとも, nom. sg. m. の語末音の正確な音価は確かめ得ない。OBERLIES が AiG III 82 (I 316f. をも参照), EDGERTON BHS Gramm. §4.34

⁵⁸ Yogasūtra I 36 *jyotiṣmatī (pravṛttih, manasaḥ)* 「思考器官の, 光を伴った顕現」参照。[D. SCHLINGLOFF Ein buddhistisches Yogalehrbuch, Berlin 1964-1966, 42f. をも参照。]

⁵⁹ *y' eko* III 1a, *y' etad* III 1d 等の可能性については, 5.1.3. 参照。

(: 語末の *a*)、⁶⁰ に言及して、テキストに直接採用する *puruṣeti* 乃至 *vṛkṣeva* の可能性も排除できない。同様の、屢々 “double sandhi” という標題で処理される現象は、個々のテキスト箇所において実際そのように実現されていたものか否か、おそらく確かめ得ないであろう。⁶¹ また、*ai /ai/* と *āi /a-i/* とが交代可能であった環境下で、*°a-i°* が、1 母音として発音されていた可能性もある。⁶²

5.1.3. III 1a には、*ya eko* (*yaḥ + eko*) が überzählig の triṣtubh 詩行において、-- の価値で現れる (→ 2.2.3. と注 17)。OBERLIES は *y' eko* を採用し、Buddh. Hybr. Skt. (EDGERTON BHS Gramm. §4.29) を指示する。⁶³ III 1d *ya etad vidur amṛtās te bhavanti* 「[彼を] このよう知っている者たちは不死となる」= III 10c.13d, IV 17d (ただし、これらの箇所では「このことを知っている者たちは」)。2.3. に引いた V 6cd も参照) は KathUp IV 2d=9d からの借用である。ここでは、ALSDORF, 1950, 624=Kl. Schr. 4 (: *yaitad*) が想定するように、*ya etad* を 2 音節に読むことができる (II 14d に見られるタイプ、→ 5.2.2.)。OBERLIES が ŚvetUp に多いとする überzählig (1 音節過多、字余り) の行中において、いくらか異例の opening *◡ - - ◡ - ◡* が想定される (→ I 9a: 5.3.)。III 2b *ya imām* (2.2.3. と注 19) をも参照。いずれにしても、5.1.2. に

⁶⁰ さらに、ALSDORF, 1950, 625=Kl. Schr. 5, SÖHNEN MSS 44, 1985, 228 および nn. 31f. 参照。

⁶¹ *e* になるとても、それに至る道程には複数の可能性が考えられる。

⁶² AiG I 318f.: §269_γ (例中、*ait* AB は除外される、TICHY Fs. Strunk, 1995, 335 n. 41, Gotō Fs. Narten, 2000, 91 参照), WACKERNAGEL Kl. Schr., 1955, 315 n. 1, HOFFMANN Aufs. II, 1976, 553; さらに、*sairāvati-* (AB VI 21, 10 にある同語を参照) に代わる *sa irāvati* AB VII 13, 6^v=ŚāṅkhŚrSū XV 17, *aiṣyat* の意味で *ayiṣyat* JB II 392: 6。[KathUp V 6a *hanta ta idam pravakṣyāmi* における *ta idam* は *°a-i°* が、1 母音として発音された可能性を支持するよう思われる。同 Up. には、さらに、IV 11d *ya iha nāneva paśyati* が見られる。]

⁶³ ただし、EDGERTON には、関係代名詞の例は挙げられていない。IV 1a *ya eko varṇo bahudhā śaktiyogād* の場合には、*ya eko* が 2 音節か (Vātormī タイプ、→ 注 68), 3 音節 (überzählig) か決定できない。

見たような, *yaḷ°, yaḷ°, y' e°* のような読みが想定される。行頭 (詩行の前) に “Auftakt” として, 1 音節語が付加されている可能性もある。sa MuṇḍUp I 1, 2d → 2.5.2.), 二次的な可能性のある *yas* (→ 5.6.) をも参照。[類似の事情は KathUp V 8 (śloka) #*yā eṣa*, VI 9 (triṣṭubh, 場合によっては überzählig) #*ya etad* にも想定される。]

5.2.1. I 7a *udgītam etat paramam tu brahma* においては, *br* は 1 子音 (*b'*) として読まれ, 正規の cadence - ◡ - ◡ が得られるであろう。V 11c *karmānugāny anukramena dehī* の場合には, *anuk'ameṇa* (*kr* が 1 子音) の読みによって, break に ◡ - ◡ が避けられた可能性がある。⁶⁴

5.2.2. I 10c *tasyābhidhyānād yojanāt tattvabhāvād* 「その [神] を思念することにに基づき, yoga を行うことにに基づき, 現実のあり方に基づき」について, OBERLIES は *tasyābhidh'ānāt* をテキストに採用し, “da die 3. Silbe kurz zu messen ist” (第 3 音節は短であるべきだから) と注記している。おそらく, Palatal 化を経た **abhijhāna-* のような語形を考えてのことであろう。しかし, break に ^l- ◡ - ◡ をもつ überzählig の triṣṭubh 行では, 屢々, 長 5 音節が先行する (古典期の Vaiśvadevī タイプ)。⁶⁵ *tasyābhidhyānād* は直後の

⁶⁴ *anuk'ameṇa* (break ◡ ◡ ◡) によって, VI 17a に見られるような韻律型が得られる。KathUp における同様の現象を SÖHNEN MSS 44 225 が集めている; おそらく *g'* KathUp VI 15b も。もし, *karmānugāny* と母音 *i* をもって読むならば, V 5a のような überzählig タイプ (caesura の直前は長, VI 2d をも参照) が得られる。

⁶⁵ I 5abd, VI 13a (=KathUp V 13a), さらに, 第 2 音節に短を伴って I 4c。Vaiśvadevī (Piṅgala VI 41) については, OLDENBERG Gesch. d. Triṣṭ., NG 1915, 511 = Kl. Schr. 1237, H. SMITH Sadd. IV, 1949, 1153: §8.3.1, 14 (: Vessadevī), 同 deux prosodies, 1949-1950, 18: §3.1, 14 参照。— 正規形 - - - - ^l- ◡ - ◡ は古典期の Śālinī に当たる (Piṅgala VI 20, OLDENBERG 同 508, H. SMITH 同 §8.3.1, 11 乃至 §3.1, 11: Śālinī): I 6ab, 8d, 10d, 11ab, 12ac, II 15d, IV 9b, 16d, V 1d (→ 2.1.), 13d, VI 11abcd, 13d。— ŚvetUp には, 4 音節から 6 音節に亘って連続する長が目立つ。その背景に, 子音グループが 1 子音に変化する MIA の音韻推移が潜んでいる可能性があるが, そのような言語層が実際にテキストとして存在したことを意味するわけではない。— OBERLIES が I 10c, I 11c に提案する, 古典期には存在しないタイプ - - - - ^l- ◡ - ◡

I 11c にも現れる: *tasyābhidhyānāt tṛtīyaṃ dehabhede* 「その [神] を思念することに基づき, 第 3 に, 肉体の壊れた後に」。⁶⁶ *tṛtīyaṃ* は, いずれにしても, OBERLIES に従って, *tṛtīyaṃ* と読まれる。⁶⁷ 5 つの長に続く *break* 〃〃〃 (*tṛtīyaṃ*) は, ŚvetUp では他に殆ど確認できないが, III 9b *yasmān nānīyo na jīyāyo 'sti kaś cit* 「それより, 誰も微細ではなく, 誰も格上ではないところの」(おそらく述語副詞 predicate adverb による)⁶⁸ がそれに当たる。OBERLIES は I 11c にも, H. SMITH Stud. Or. XLI: 5, 1951, 15 n. 2 に従い, *tasyābhidh'ānāt* をテキストに据える。それによって, ---〃---¹〃〃〃---〃〃〃--- という行が得られ, このタイプは II 14d, III 2a, IV 1b, 4a にも見られる。⁶⁹ *abhidhyāna-* の読みは, 要するに, 決定できない。

5.3. I 9a を諸版は *jñājnāu dvāv ajāv īsanīsau* としている (2.2.4. 参照)。おそらく, /*jñāajñāu duvāv* (あるいは *duvau*¹) *ajāv īsanīsau*/ と読み, 〃---〃〃¹〃---〃〃〃の韻律を示す。「理解する者と理解しない者は, 両者とも, 支配する者と支配しない者として」(→ 5.4.6.)。OBERLIES は *jñājnāu d_uvau aj_aāv īsanīsau* とし, “so ist metri casa zu lesen, da die zweite Silbe nach der Zäsur kurz sein muß” (caesura 直後の第 2 音節は短) と注記する (n. 111)。しかし, *ajaaū* のような双数形は動機付けられない。第 4 音節の後

---〃--- は, ŚvetUp V 2d に見られる (→ 2.4.2.)。

⁶⁶ *deha-bheda-* については, Aitareya-Upaniṣad II 6 *asmāc charīrabhedād ūrdhavam utkramya*, PrasUp VI 5 *bhidhyete ... nāmarūpe*, Pāli *kāyassa bheda* 「身体の破れにより」, *khandānaṃ bhedo*; さらに, 室寺義仁, 密教文化 190, 1995, 112-101, 印度学仏教学研究 43-2, 1995, 914-910 参照。

⁶⁷ OBERLIES ad loc. (WZKS 39, 1995, 90 n. 131, Lit. あり)。さらに, EDGERTON BHS Dic. s. v. *tṛtīya*, H. SMITH 引用箇所。

⁶⁸ 正規形 ---〃---¹〃〃〃---〃〃〃 (古典韻律の Vātormī, Piṅgala VI 21; OLDENBERG [→ 注 65] 508, H. SMITH [→ 注 65] §8.3.1, 9 ないし §3.1, 9: Vātummī) 参照: I 8b, III 4a=IV 12a, IV 9c, 22a (RV のヴァリエント, Jagatī), V 1b, VI 6d (第 4 音節が短), 12b, 15a。

⁶⁹ 古典韻律に現れないこのタイプについては, H. SMITH [→ 注 65] 1152: §8.3.1, 02-3 乃至 18: §3.1, 02-3 参照。

の -¹ - という形は, *caesura* の移動 ¹ - - > -¹ - によってもたらされた可能性がある。⁷⁰ VI 2b = 16b *jñah kākakāro guṇi sarvavidyah*,⁷¹ IV 4c *anādīmat tvam vibhutvena vartase* (Jagatī 行) 参照。⁷² もっとも, ŚvetUp が編まれた時点で, 双数形が実際どのようなものであったかについて, 我々は知識を有しない。

5.4. *hy* と *tv* は幾つかの場所で, 語末母音と語頭母音の *sandhi* を回避するために用いられている。⁷³ 意味を担う場合と, 単に音韻上の理由から (二次的に) 挿入されている場合とがある。

5.4.1. 意味を伴う真性の *tu* は I 2c の母音間に現れる: *saṃyoga eṣām na tv ātmabhāvād* 「これらのものたちの結合は, しかし, ātman が存在することから, [考慮すべき *cintya*-] ではない」。文中の *saṃyoga eṣām* は, 先行する様々な, 当時までに権威あるとされてきた諸原理 (*kāla* - ... *bhūtāni* ... *puruṣa*-) との対比のため文頭に置かれ, そのため, *tu* が *caesura* の後で, 通常の 2 番目の位置を占める。*na tu* で始まる文は多い。V 1d (→ 5.4.3.) も同様である。意図されているのは, おそらく, 仏教の (五) 蘊理論の否定である。

5.4.2. IV 5c *ajo hy eko juṣamāno 'nuṣete* (= MNārUp, VARENNE Nr. 210) 「唯一

⁷⁰ break - - を示す詩節は ŚvetUp に大変多い。Śālinī, Vaiśvadevī 両タイプ (→ 注 65) がこれに属す。注 77 をも参照。

⁷¹ 「認識力を持ち, 時を作り, 諸要素を備え, 全知芸をもつ者」。 *agūṇi* による *überzählig* 行の可能性も考えられる。OBERLIES ad VI 2 (WZKS 42, 1998, 110 n. 203, 208) 参照。

⁷² 「君は始まりをもたず, 遍く現れる者として展現している」。KaṭhUp II 9b *proktānyenaiva sujñānāya preṣṭha* は *su'ñānāya p'ṛeṣṭha* の読みによって (SÖHNEN MSS 44, 1985, 225), - - - -¹ - - - - という, Vātorṃī タイプ (→ 注 68) から *caesura* 移動 - - - - > -¹ - によって導かれる型を示す。ALSDORF 1950, 624 = Kl. Schr. 4: "*sujñānāya prayiṣṭha* = - - - -¹ -" は無理である。

⁷³ NAKATANI, 1994, 303-308, 特に Udānavarga から: 307 参照。

の不生の者／雄山羊は、まさしく、喜びを享受しながら、横たわって控えている」においては、*hy* の位置は正常であり、文を強調して、続く Pāda d *jahāty enām bhuktabhogyām ajo 'nyah* 「別の不生の者／雄山羊は、享受すべきものを享受し終えた当の者たちを後にする」との対比を強調する役割を負うものと理解できる。

5.4.3. V 1

dve akṣare brahmaṣare tv anante¹ vidyāvidye nihite yatra gūḍhe. |
kṣaram tv avidyā hy amṛtam tu vidyā.¹ vidyāvidye īśate yas tu so 'nyah.

||

その中に知 (*vidyā*) と知らざるもの (*avidyā*) とが隠されて保存されているところの

2つの音節 (*ātmā*, あるいは、2つの不滅のものたち) は無限であるが、**〈それでも〉**, *brahmaṇ* を [両者を] 超えるものとして有する。

知らざるもの (*avidyā*) は、**〈しかし〉**, **〈実に〉** 滅するものであり、知 (*vidyā*) は、**しかし**, 不死である。

知と知らざるものとを支配している者、それは、**しかし**, 別の者である」。

c 行の caesura 直後の *hy* は正当化されない。sandhi の影響下にある 2 箇所での *tv* の正当性も疑わしい。*tu* は 2 箇所ともに意味があり、語順も正当である。

5.4.4. VI 17a *sa tanmayo hy amṛta īśasamstho* 「彼はそれ自身から成り⁷⁴, 不死で、支配者たちの窮極に位置する」においては (cd → 2.2.3.), *hy*

⁷⁴ RAU “eines Wesens mit ihm”; OBERLIES “Derjenige, [der] eines Wesens mit [Rudra und damit] unsterblich [geworden ist], im Herrscher weilend”. → 2.3. および注 23。

の位置は真性のものとは思われない。語を強調する機能を仮定して、「まさしくそれからなる」、「それからなるのだから」という解釈は苦しい。

5.4.5. Up. を締めくくると最後の VI 23cd *tasyaite kathitā hy arthāḥ | prakāśante mahātmanāḥ* 「そういう偉大な自己をもつ者に属するものとして、ここに語られた事柄は明らかになる」における *hy* は二次的に挿入されたものと思われる。⁷⁵

5.4.6. 真性の *hy* とと思われるものが母音間に現れる: I 9

*jñājñāu dvāv ajāv īsanīśau*⁷⁶. ¹*ajā hy*⁷⁷ *ekā bhokṛṭṛbhogyārthayuktā. | anantaś cātmā. viśvarūpo hy akartā. | trayam yadā vindate brahman etat. ||*

理解する者と理解しない者は、両者とも、支配する者と支配しない者として不生の者である。

唯一の不生の [prakṛti, OBERLIES による] が享受者と享受の対象とに結びつけられている [に過ぎない] から。

そして, ātman は無限である。行為者ではないのに、全ての形姿をとるのだから。

3つ一組のものをひとが見出す時には即ち、これが brahman である。

⁷⁵ 一種の帰依文 VI 18 (→ 2.4.) に続く, 19, 20, 22a-c, そして, 最終の 23 は śloka (pathyā) である。VI 21 は triṣṭubh (ただし, a 行末には, 余分な *ca* が付加されている), 22d は jagati 行。「…に属するものとして」と訳した gen. は, MIA におけるように, dat. の機能を担うものとも解される。

⁷⁶ /jñājñāu dvāv.../ → 5.3. 参照。

⁷⁷ OBERLIES は triṣṭubh の第3音節は短という前提のもとに (“da die dritte Silbe der Triṣṭubh kurz messen sollte”), *h₁y* と読む。この場合, III 7b, IV 1c に見られるタイプが得られる。しかし, break が ¹- - - という形をもつ場合には, この要請は当たらない。同じ型 - - - - ¹- - - - は I 4b, IV 5d, VI 12c, IV 11d = KathUp I 17d に現れる。さらに, Śālini および Vaiśvadevi タイプ (注 65) について, 注 70 参照。

ajau (*aja-*と*ajā-*)には「雄山羊」と「雌山羊」の意味が懸けられているように思われる。*bhuktabhogya-*に言及する IV 5 参照 (→ 5.4.2.)。 *iśānīśau* については 2.2.4., *brahmam* については 5.5., Pāda a の韻律については 5.3. 参照。

5.5. I 9d, I 12d の cadence *brahmam etat* に見られる *brahmam* (nom. sg. n.) について Tsuchida, 1985, 467⁷⁸ は, *brahmam* の形が, 他に MNārUp において *e°* の前に現れるのみであり (*madhum* nom. も), 子音の前では正規形 *brahma*, *madhu* が用いられることを確認した上で, “the final -m of brahman should be regarded as a kind of hiatus-bridger rather than a case-ending of the vowel declension” と判断する。しかし, この *m* の背景には, 現実の言語現象があった可能性がある: MIA において, *-an-* 語幹の *-m* 語形は先ず acc. に, その後, 部分的に nom. にも広がった, cf. v. HINÜBER Überblick, 1986, 153: §348 と Lit. I 6a の Pāda 末には loc. sg. *bṛhante* が見られる (cf. HAUSCHILD 61. MIA における *-ant-* 語幹の thematic 化については, v. HINÜBER 同 156: §359 と Lit.)。このような言語状況を背景に想定すれば, 一種の韻律上のヴァリエーションということになる。⁷⁹

III 17c *sarvasya prabhum iśānam* において, *prabhum* は Tsuchida 同論文 465-464 が理解するように, nom. sg. n. と解し, 16a *tat*, 17d *śaraṇam* と結ぶべきであろう。⁸⁰ この *-m* が単なる Sandhi-Füllsel⁸¹ でないことは,

⁷⁸ 同論文 466 は I 12c *bhoktābhogyam* を *°tar-* 語幹の nom. sg. 形を前肢にもつ複合語と説明している。5.4.6. に引いた I 9b *bhoktr̥bhogyā°* 参照。

⁷⁹ *b_arahmā* の場合について, 注 26 参照。

⁸⁰ III 16f. *sarvataḥpāṇīpadam tat¹ sarvato¹ kṣīsiromukham ... sarvam āvṛtya tiṣhati. || ... sarvasya prabhum iśānam¹ sarvasya śaraṇam bṛhat. || 「彼 (14-15 = RV X 90, 1-2 Puruṣasūkta に述べられる *puruṣa-*). *tat* は述語名詞として予定される *śaraṇam* に合わせた結果) は, あらゆるところに手足をもち, あらゆるところに眼, 頭, 顔をもち [避難所として] 一切を覆って存している。... 一切を, 卓越して支配している, 一切の高い避難所である」 (16 = Bhagavad-Gītā XIII 13; 17ab = 同 14 ab)。*

TSUCHIDA が指摘するように, *vibhum sarvagatam* (nom.) MuṇḍUp I 1, 6 によって示される, SALOMON WZKS 25, 1981, 94 (EDGERTON BHS Gramm. §12. 29, および, RENOU Gramm. scr. §247d, 4 を指示) 参照。 *madhum* MNārUp が同様に解されることは既述。 MIA -u- 語幹名詞における -m 形 (就中 acc., 部分的に nom. においても) をも参照 (v. HINÜBER 同書 147: §325 に Lit. あり)。

5. 6. VI 10 を OBERLIES は HAUSCHILD 同様, *yas tantunābha iva tantubhiḥ pradhānajaiḥ¹ svabhāvataḥ deva ekaḥ svam āvṛṇot | sa no dadhāt brahmāpyayam* と分節する。 Pāda a は所謂 double sandhi を伴う *tantunābheva* と読むことによって, 典型的な 1 音節過剰な (überzählig) Jagati 詩行が得られるとする。 おそらく, *yas tantunābha* (あるいは **bho*)¹ *va tantubhiḥ pradhānajaiḥ* を考えているのであろう。 caesura の無い “typisch überzählig” は考えられないからである。 しかし, いずれにしても *iva* が caesura の直後に出ることは想定しがたい。 次のように分節すれば, ヴェーダに見られる *anuṣṭubh* が得られる:⁸²

[yas] tantunābho 'va⁸³ tantubhiḥ¹ pradhānajaiḥ svabhāvataḥ |
deva ekaḥ svam āvṛṇot.¹ sa no (')dadhāt brahmāpyayam. ||

ただし, Pāda a は 1 音節過剰である。 *yas* を除外すれば, 次のように訳すことができる:

蜘蛛⁸⁴ が [経] 糸たちによって, のように,

⁸¹ WINDISCH Sandhiconsonanten, 1893, 228-246 = Kl. Schr., 2001, 488-506.

⁸² RAU も同様に解するが, *y' ūrṇanābheva* と修正する。しかし, *tantunābha* という語が実際に用いられていたことについては, → 注 84。

⁸³ → 5. 1. 2. と注 53。

⁸⁴ *tantunābha* (「臍に [経] 糸をもつ者」) の語は (PW および) pw によれば, 当該箇所にもみ見られる。しかし, さらに, Śaṅkara ad Brahma-Sūtra II 1, 25 *tantunābhas ca svata eva tantūn sṛjati* 「そして, 蜘蛛は, 自分から (経) 糸たちを

原材料から生じる [śakti- たちか。8c, ただし sg, 参照] を用いて,
 彼自身のあり方に基づいて,
 唯一の神は彼に属するもの (世界) を覆う。
 かくして彼は、我々の brahmaṇ への帰入を定める / 定めた。⁸⁵

yas が d の sa no ... に対応するものとして、二次的に加えられた可能性が疑われる, 5.1.3. 末をも参照 (場合によっては, yas は “Auftakt” とも)。(‘) *dadhāt*⁸⁶ と *āvṛṇot* は RV の inj. に倣った archaism とも考えられる (→ 注 13)。

出す。「蜘蛛」 (*ūrṇā-vābhi*, *ūrṇā-vābhi*, *ūrṇa-nābhi*, *tantu-vāpa*- など) については, DEBRUNNER Fs. Sommer, 1955, 20-25 参照 (OBERLIES WZKS 42, 1998, 116 n. 249)。

⁸⁵ あるいは: 我々に, brahmaṇ を帰入先として定める。

⁸⁶ 異読: *dadhātu*, *dadyāt*. *dadhāt* は subj. とは解しがたい (OBERLIES “soll uns ... verleihen”, HAUSCHILD “der verleihe uns ...”). subj. 3. sg. は RV から ŚB に至るまで *dādhat* として在証される。ただし, 解釈によっては, Pāṇini VII 3, 70 が subj. 3. sg. *dadhāt* を考えている可能性もある。

略語表

AĀ Aitareya-Āraṇyaka — AB Aitareya-Brāhmaṇa — acc. accusative
 — AiG → WACKERNAGEL, DEBRUNNER — AV Atharvaveda (Śaunaka)
 — AVP Atharvaveda (Paippalāda) — BĀU Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad
 (-M: Mādhyandina, -K: Kāṇva) — BHS, Buddh. Hybr. Skt. “Buddhist Hybrid
 Sanskrit” — Br. Brāhmaṇa(s) — caus. causative — ChU
 Chāndogya-Upaniṣad — Cl. Classical Sanskrit — cr. ed. critical edition
 — Ep. Epic Sanskrit (Mahābhārata, Rāmāyaṇa) — gen. genitive —
 GopB Gopatha-Brāhmaṇa — GṛSū. Gṛhya-Sūtra(s) — iptv. imperative
 — ind. indicative — inj. injunctive — JB Jaiminiya-Brāhmaṇa —
 JUB Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa — KaṭhUp Kaṭha-Upaniṣad —
 KB Kauṣītaki-Brāhmaṇa — Kh Ṛgveda-Khila — Lit. (with) literature
 「研究論文, 文献の指示, 列挙(あり)」 — ManSmṛ Manu-Smṛti —
 MBhār Mahābhārata — MIA Middle Indo-Aryan 中期インドアーリヤ語
 — MNārUp Mahānārāyaṇa-Upaniṣad — MuṇḍUp Muṇḍaka-Upaniṣad
 — Mv Mahāvastu — nom. nominative — OIA Old Indo-Aryan 古イ
 ンドアーリヤ語 (Veda 語, Sanskrit 語) — opt. optative (願望法) — Pkt.
 Prakrit (=MIA) — PraśUp Praśna-Upaniṣad — pres. present (現在語
 幹) — Pur. Purāṇa(s) — PW “großes Petersburger Wörterbuch”, →
 BÖHTLINGK-ROTH — pw “kleines Petersburger Wörterbuch”, → BÖHTLINGK
 — RV Ṛgveda (“Saṃhitā”) — Skt. Sanskrit — subj. subjunctive
 (Konjunktiv, 接続法) — s. v. sub verbō 「(以下の) 語 (項目) 下」 —
 ŚvetUp Śvetāśvatara-Upaniṣad — TB Taittiriya-Brāhmaṇa — TS
 Taittiriya-Saṃhitā — Up. Upaniṣad(s) — v.adj. verbal adjective
 (Verbaladjektiv, 過去分詞) — YS^m Yajurveda-Saṃhitā (mantra) — YS^p
 Yajurveda-Saṃhitā (prosa: “brāhmaṇa”).

例えば, *b_orāhmaṇo* は, テキストには *brāhmaṇo* と伝えられ編集されて
 いるが, 実際の発音は (韻律上) *barāhmaṇo* であったと, *anuk'ameṇa*
 は, *anukrameṇa* と伝承編集されているが, *anukameṇa* であったと想定
 することを示す。

索引

引用言及箇所 Śvetāśvatara-Upaniṣad I 1 (1.), 2b (5.1.2.), 2c (5.4.1.), 6a (5.5.), 6d (2.2.4., n. 29), 7a (5.2.1.), 9 (5.4.6.), 9a (2.2.4., 5.3.), 9d (5.5.), 10b (2.1.), 10c (5.2.2.), 11c (5.2.2.), 12d (5.5.), 13 (3.) — II 11b (4.), 14 (2.6.), 14c (3.), 17c (4.) — III 1ab (2.1., 2.2.3.), 1d (5.1.3.), 2b (2.1., 2.2.3.), 4c (n. 32), 8d (2.2.3.), 9b (5.2.2.), 9c (5.1.2.), 10c (5.1.3.), 13d (5.1.3.), 16–17 (n. 80) — IV 1a (n. 63), 4c (5.3.), 5c (5.4.2.), 12c (n. 32), 17d (5.1.3.) — V 1 (5.4.3.), 1d (2.1.), 2cd (2.4.2., 2.5.1.), 4 (n. 56), 6 (2.3.), 11c (5.2.1.) — VI 2b (5.3.), 2c (2.2.1.), 9ab (2.2.2.), 10 (5.6.), 10a (5.1.2.), 15d (2.2.1.), 16b (5.3.), 17a (5.4.4.), 17cd (2.2.3.), 18 (2.4.1.), 23cd (5.4.5.). — **Kaṭha-Upaniṣad** II 9b (n. 72), IV 2d=9d (5.1.3.). — **Muṇḍaka-Upaniṣad** I 1, 1–3 (2.5.2.), I 2, 9–10 (n. 25), I 2, 12 (2.5.3.). — **Ṛgveda** I 30, 9bc (n. 28), II 37, 2ab (n. 28), X 27, 16cd (n. 35), X 69, 10ab (n. 35), X 95, 7a (n. 32). — **Jaiminīya-Brāhmaṇa** III 74: 1 (n. 32). — **Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa** I 18, 8 [I 4, 4, 8] (n. 32), III 5, 6 [III 1, 5, 6] (2.6.). — **Pāli Jātaka-a** I 51, -1 (n. 32).

動詞語形 (ほか)

<i>as/s</i>	<i>sma</i> 1., <i>sva</i> , <i>sma</i> n. 4
<i>ah</i>	<i>prāha</i> (MuṇḍUp) 2.5.2; 補完活用 (suppletion, Suppletion) n. 43
<i>adhi-i</i>	<i>ādhihi</i> n. 34
<i>iś</i>	3. sg. <i>iśate</i> , <i>iśe</i> , <i>iśte</i> 2.1., <i>iśe</i> n. 11, <i>iśte</i> n. 12; <i>iśanī-</i> (III lab. 2b), <i>iśana-</i> (VI 17) 2.2.3; <i>iśita-</i> (IV 2c) 2.2.1.; <i>iśitar-</i> (VI 9b) 2.2.2.; <i>iśaniśau</i> (I 9a) 2.2.4.; <i>iś-</i> n. 22; <i>iśa-</i> , <i>an-iśa-</i> , <i>iśvara-</i> 2.2.5.
<i>gam</i>	<i>adhi-gacchet</i> (MuṇḍUp) 2.5.3.
<i>jīv</i>	<i>jivāma</i> 1.
<i>darś/dṛś/paś</i>	<i>paśyet</i> (V 2d) 2.5.1.; <i>pari-dṛś/paś</i> n. 32
<i>dhmā/dhamⁱ</i>	<i>su-dhānta-</i> (II 14b) 2.6.

<i>pra-pad</i>	n. 30
<i>bravⁱ/brū</i>	補完活用 (suppletion) n. 43, [<i>anu-</i>] <i>brūhi</i> n. 34
<i>bhar/bhṛ</i>	<i>bibharti</i> 2.4.2. , <i>bibhṛhī</i> n. 34
<i>bhavⁱ/bhū</i>	<i>bhavate</i> 2.6. ; <i>anu-bhūtvā</i> n. 25
<i>man</i>	<i>abhi-manyanti</i> (MuṇḍUp) n. 25
<i>vac/uc</i>	補完活用 (suppletion) n. 43
<i>vadⁱ/udⁱ</i>	<i>pra-vadeta</i> (MuṇḍUp) 2.5.2.
<i>vedⁱ/vidⁱ</i>	<i>vedate</i> (V 6b) 2.3. ; <i>vedāya^{-te}</i> 2.3. , n. 25, <i>pra-vedayati</i> n. 25; Buddh. Hybr. Skt. <i>veda^{-ti}</i> 2.3. ; <i>vidur</i> (<i>pūrvam</i> + V 6c) 2.3. , 2.4.1.
<i>śās</i>	<i>ānu...</i> <i>śādhi/śāsta</i> n. 34
<i>savⁱ/sū</i>	<i>pra-sūta-</i> (V 2c) 2.4.2.

その他の語形

<i>itara-</i>	n. 3
<i>iva, ⁱva, iya</i>	3.
<i>uttaratarā-</i> (III 10a)	n. 20
<i>kāraṇa-</i>	1. , n. 2
<i>tad(-)vā</i> (I 13d, II 14c)	3.
<i>tantunābha-</i>	5.6. , n. 82
<i>tu</i>	5.4.
<i>ṛtīya-</i> (I 10c)	5.2.2.
<i>deha-bheda-</i>	n. 66
(-) <i>dhanta-</i> (MIA)	n. 47
<i>prabhum</i> (III 17c)	5.5.
<i>bimba-</i>	2.6.
<i>brhante</i> (I 6a)	5.5.
<i>brahmaṇ-</i>	n. 26, 5.2.1.
<i>brahmam</i>	5.5.
<i>Bhava-</i>	n. 15

<i>bhoktābhogyam</i> (I 12c)	n. 78
<i>maṇisūtra-</i>	n. 32
<i>madhum</i> (MNārUp)	5.5.
<i>mṛdā-</i>	2.6.
<i>vanaspatiṣu</i> (II 17c)	4.
<i>vā</i>	3.
<i>yāthā vā, yá- vā</i>	n. 54
<i>vibhum</i> (MuṇḍUp I 1, 6)	5.5.
<i>vyavasthā-</i>	1.
<i>vyākaraṇa-</i>	n. 9
<i>śaraṇam gam</i>	n. 30
<i>saṃ-ṭṛati-ṣṭha-</i>	1.
<i>sudhānta-</i> (II 14b)	2.6.
<i>sphaṭikaśaśinām</i> (II 11b)	4.
<i>hi</i>	5.4.

文法事項

述語的副詞 predicate adverb **5.2.2.** — Agnicayana **2.6.** — archaism, (擬)古形 n. 13 (*devānām* IV 13a, *viśvā* IV 4d, *paśyata* IV 12c), **5.6.** (*dadhāt, āvṛnot* V 10dc) — (主語代名詞の)一致 (agreement, Kongruenz) n. 2, **2.3.**, n. 80 — 要請の表明 Aufforderungsformel (*bibhṛhī, ādhihi, anu... śādhi/śāsta, [anu-]brūhi*) n. 34 — 文法的逸脱 Entgleisung: → 語彙索引 *as (sma)*, 3. sg. *iśate, jīvāma, bhavⁱ, man, vedate; bṛhante, brahmam, mṛdā-, *vanaspatiṣu* — 名詞活用 4. — 名詞派生 (*iś* からの) **2.2.**, n. 20 — 名詞複合語 n. 3, **2.2.4.**, **4.1.**, n. 78.

動詞 (2.)

pūrvam, agre + ind. pres. **2.4.**: *pūrvam* + *vidur* (V 6c), + *vidadhāti, prahiṇoti* (VI 18ab), *purā, sma* + ind. pres./aor. **2.4.1.**, n. 28, n. 31; *agre ... bibharti* (V 2cd) **2.4.2.**; Pāli *ekaṃ samayaṃ ... viharati* **2.4.3.**; inj. → 文法事項 archaism;

過去の出来事に関わる opt. **2.5.**, n. 40, 過去の出来事に関する推量 *paśyet* (V 2d) **2.5.1.**, *pravadeta* (MuṇḍUp) **2.5.2.**, *adhigacchet* (MuṇḍUp) **2.5.3.**; 補完活用 (suppletion, Suppletion, Suppletivismus) n. 43.

音 韻 (5.)

b^r, *k^r* **5.2.1.**, *g^r* n. 64, *jñ*, *p^r* n. 72; **ṛṭiya*-**5.2.2.**; *t^y e°* **5.1.1.**; °*o'ti*, °*o'va* (sandhi °*a iti*, °*a iva* に代わり) **5.1.2.**; *a + a > ā* **2.2.2.**; “double sandhi” **3.**, **5.1.2.**, **5.1.3.**, **5.6.**; *ty*, *tv* **5.4.**; *-m* **5.5.**; elision **5.1.1.**, n. 59, **5.1.2.**, **5.1.3.**

韻 律 (5.)

韻律上の要請 (metrī causā) **1.**, n. 3, **2.1.**, n. 26, **4.**, 母音短縮 **2.2.3.**, **2.2.4.**, 縮約 (contraction) **2.3.**, ヴァリアント **1.**, **4.**, **5.5.**; resolution, Auflösung n. 19, n. 29, n. 45; — opening, Eingang **2.1.**, n. 45, **5.1.3.**, **5.3.**; cadence, Kadenz **1.**, **2.**, **2.3.**, **2.2.4.**, **4.**, **4.1.**, **5.1.1.**, **5.1.2.**, **5.2.1.**, **5.5.**; break, Mittelsilben **2.1.**, n. 29, n. 45, **2.2.4.**, n. 57, **5.2.1.**, **5.2.2.**, n. 64, n. 70, n. 77; caesura, Zäsur n. 26, n. 29, n. 45, n. 57, n. 64., **5.3.**, **5.4.1.**, **5.4.3.**, **5.6.**, caesura の移動 (Verlagerung der Z°) **5.3.**, n. 72; caesura の欠如 (zäsurlos) n. 26, n. 57; — 1 音節過多行 (überzählig) **5.1.3.**, n. 63, **5.2.2.**, n. 64, n. 71, **5.6.**; 1 音節不足行 (unterzählig) n. 26; — Upajāti **1.**; Vaiśvadevī **5.2.2.**, n. 65, n. 70; Vātormī n. 63, n. 68, n. 72; Śālinī n. 65, n. 70.

Buddh. Hybr. Skt. n. 4, **2.2.4.**, **2.3.**, n. 29, n. 31, **2.4.3.**, n. 36, **2.6.**, n. 47, **3.**, n. 53, **4.**, n. 57, **5.1.2.**, **5.1.3.**, n. 67, **5.5.**; — **Pāli, MIA** n. 4, n. 14, **2.2.4.**, **2.3.**, n. 26, n. 27, n. 28, n. 31, **2.4.3.**, n. 35, n. 37, **2.6.**, n. 47, n. 48, **3.**, n. 53, **4.**, **4.1.**, n. 57, **5.1.2.**, n. 65, **5.5.**

主 要 Edition

Ed. Ānandāśr.Skt.Ser.:Kṛṣṇayajurvediyaśvetāśvataropanioṣacchāṃkara-bhāṣyopetā. Ānandāśramasamskṛtagranthāvaliḥ. Granthāṅkaḥ 17. Poona (第2版は H. N. ĀPTE により 1905 出版。1982 年版を用いた)。

Ed. Bibliotheca Indica: The Taittiri'ya and Aitare'ya Upanishads, with the commentary of Sankara A'cha'rya, and the gloss of A'nanda Giri, and the Swe'ta'swatara Upanishad with the commentary of Sankara A'cha'rya,, Edited by Dr. E. RÖER. Calcutta 1850. Bibliotheca Indica. Vol. VII.-Nos. 22, 33, 34.

The Śaiva Upaniṣad-s with the commentary of Sri Upaniṣad-Brahma-Yogin. Edited by Pandit A. MAHADEVA SASTRI. The Adyar Library and Research Centre. Madras 1825 (second reprint 1988).

One Hundred & Eight Upanishads (Īsha & others). Edited by Wāsudev Laxman Shāstrī PAṆŚĪKAR. Bombay, Nirṇaya-Sāgar-Press³1925, ⁴1932, ²1983.

文 献

- L. ALSDORF Contributions to the Textual Criticism of Kaṭhōpaniṣad. ZDMG 100, 1950, 621-637 = Kl. Schr. 1-17.
 — Kleine Schriften. Herausgegeben von A. Wezler. Wiesbaden 1974.
- A. ASHIKAGA (ed.) Sukhāvativyūha. Kyoto 1965.
- R. G. BHANDARKAR Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems. Poona 1913 (, 1929).
- J. BLOCH Les inscriptions d'Asoka. Traduites et commentées. Paris 1950.
- O. BÖHTLINGK Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung. 7 Theile. St. Petersburg 1879-1889. [pw]
 — Über die Verwechslung von *pra-sthâ* und *prati-sthâ* in den Upanishaden. Berichte über die Verhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, Philologisch-Historische Klasse [BKSGW] 43, 1891, 91-95.
 — Kritische Beiträge. BKSGW 53, 1901, 7-19.
- O. BÖHTLINGK, R. ROTH Sanskrit-Wörterbuch. 7 Bde. St. Petersburg 1855-1875. [PW]
- J. P. BRERETON Unsounded speech: Problems in the interpretation of BU (M) 1. 5. 10 = BU (K) 1. 5. 3. Indo-Iranian Journal 31, 1988, 1-10.

- J. BROCKINGTON The Verbal System of the Rāmāyaṇa. Journal of the Oriental Institute, M. S. University of Baroda [JOIB] 19, 1969, 1-34. (主として Rām II, III から。)
- J. BROUGH Thus Have I Heard.... Bulletin of the School of Oriental and African Studies 13, 1950, 416-426. = Collected Papers 63-73.
— Collected Papers. Edited by M. Hara and J. C. Wright. School of Oriental and African Studies, University of London 1996.
- G. CARDONA Pāṇini. His Work and its Traditions. 2nd ed., rev. and enl. Delhi 1997.
- W. COWGILL The first person singular medio-passive of Indo-Iranian. Pratiḍānam. Indian, Iranian and Indo-European studies presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper on his sixtieth birthday. Edited by J. C. Heesterman, G. H. Schokker, V. I. Subramoniam. The Hague, Paris 1968, 24-31. = Collected Writings 85-91.
— The Collected Writings of Warren Cowgill. Edited with an Introduction by J. S. Klein. Ann Arbor, New York 2006.
- A. DEBRUNNER Das altindische Wort für die Spinne. Corolla Linguistica. Festschrift Ferdinand Sommer zum 80. Geburtstag am 4. Mai 1955, dargebracht von Freunden, Schülern und Kollegen. Wiesbaden 1955, 20-25 (NIA 3, 1940-1941, 129-131 にも A-I. *ūrṇāvabhi-* “Spinne” と題して発表).
- B. DELBRÜCK Altindische Syntax. (Syntaktische Forschungen V). Halle an der Saale 1888.
— Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen. Dritter Theil. Strassburg 1900. (Grundriss der vergleichenden Grammatik von K. Brugmann und B. Delbrück, 5ter Band.)
- F. EDGERTON The Epic Triṣṭubh and Its Hypermetric Varieties, Journal of the American Oriental Society [JAOS] 59, 1939, 159-174.
— The Meter of Saddharmapuṇḍarika. Kuppuswami Sastri Commemoration Volume. By S. Kuppuswami Sastri, 1937, 39-45.

- Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit. JAOS 66, 1946, 197-206.
- Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary. New Haven 1953.
- K. FUJITA (ed.) The Larger Sukhāvativyūha. Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal. 3 parts. Tokyo 1992, 1993, 1996.
- 舟山徹「如是我聞」か「如是我聞一時」か — 六朝隋唐の「如是我聞」解釋史への新視角。法鼓佛學學報 (Dharma Drum Journal of Buddhist Studies) 1, 2007, 241-275.
- W. GEIGER Pāli Literature and Language. Authorised English translation by Batakrishna Ghosh. Calcutta 1943.
- Badrolzman GHARĪB The shift of optative mood (formation) to durative preterite in some Iranian languages. Indogermanica. Festschrift Gert Klingenschmitt. Herausgegeben von Günter Schweiger. Tübingen 2005 [2006], 145-154.
- J. GIPPERT Verbum dicendi + Infinitiv im Indoiranischen. Münchener Studien zur Sprachwissenschaft [MSS] 44 (Festgabe für Karl Hoffmann, Teil I), 1985, 29-57.
- G. GORRESIO Ramayana. Poema Indiano di Valmici. Testo Sanscrito secondo i codici manoscritti della Scuola Gaudana per Gaspare Gorresio. Vol. 2. Parigi 1843.
- T. GOTŌ Die "I. Präsensklasse" im Vedischen. Wien 1987 (²1996).
- T. Gotō Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen 1-3. 国立民族学博物館研究報告 (Bulletin of the National Museum of Ethnology) 15-4, 1990[4. 1991], 987-1012.
- 同 16-29 [4. Serie]. 同 22-4, 1997[4. 1998], 1001-1059.
- Zur Geschichte vom König Jānaśruti Pautrāyaṇa (Chāndogya-Upaniṣad IV 1-3). Studien zur Indologie und Iranistik 20 (Festschrift Thieme), 1996, 89-115.
- Zur Lehre Śāṇḍilyas. Langue, style et structure dans le monde indien. Centenaire de Louis Renou, 1996[1997], 71-89.

- Überlegungen zum urindogermanischen «Stativ». Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy. Actas del Coloquio de la Indogermanische Gesellschaft, Madrid, 21-24. de septiembre de 1994, 1997[1998], 165-192.
- Zur Sprache der Śvetāśvatara-Upaniṣad. Vividharatnakaraṇḍaka. Festgabe für Adelheid Mette. Herausgegeben von Chr. Chojnacki, J. - U. Hartmann und V. Tschannerl, Indica et Tibetica 37, Swisttal-Odendorf 2000, 259-281.
- “Purūravas und Urvaśī” aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. Ikari). Anusantatyai. Festschrift für Johanna Narten zum 70. Geburtstag, MSS, Beiheft 19, Dettelbach 2000[2001], 79-110.
- Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background, in cooperation with J. S. Klein and V. Sadovski. Wien 2013.
- H. GRASSMANN Wörterbuch zum Rig-Veda. Leipzig 1873 (1872-1875).
- R. HAUSCHILD Die Śvetāśvatara-Upaniṣad. Abhandlungen für die Kunde der Morgenländischen Gesellschaft 17-2, 1927.
- J. HERTEL Muṇḍaka-Upaniṣad. Kritische Ausgabe mit Rodarneudruck der Erstaussage (Text und Kommentare) und Einleitung. Leipzig 1924.
- O. VON HINÜBER Studien zur Kasusyntax des Pāli, besonders des Vinaya-Piṭaka. München 1968.
- Das ältere Mittelindisch im Überblick. Wien 1986.
- K. HOFFMANN Der Injunktiv im Veda. Heidelberg 1967.
- Aufsätze zur Indoiranistik, herausgegeben von J. Narten. Band 2. Wiesbaden 1976.
- A. HOLTZMANN Grammatisches aus dem Mahabharata. Ein Anhang zu William Dwight Whitney's Indische Grammatik. Leipzig 1884.
- W. HOPKINS Notes on the Çvetāçvatara, the Buddhacarita, etc. JAOS 22, 1901, 380-389.
- H. JACOBI Über eine neue Sandhiregel im Pāli und im Prakrit der Jainas und über die Betonung in diesen Sprachen. Indogermanische Forschungen

- 31, 1913, 211-221 = Kl. Schr. 89-99.
- Kleine Schriften. Herausgegeben von B. Kölver. 2 Teile. Wiesbaden 1970.
- St. W. JAMISON *The Ravenous Hyenas and the Wounded Sun. Myth and Ritual in Ancient India.* Ithaca, New York, London 1991.
- J. KELLENS *Verbe avestique.* Wiesbaden 1984.
- C. KIEHNLE *Vedisch ukṣ und ukṣ/vakṣ. Wortgeschichtliche und exegetische Untersuchungen.* Wiesbaden 1979.
- S. KONOW *Future forms denoting past time in Sanskrit and Prakrit.* Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap [NTS] 9, 1938, 231-239.
- M. KÜMMEL *Das Perfekt im Indoiranischen.* Wiesbaden 2000.
- B. KÜNZLE *Armenisch hark' 'Eltern': ein elliptischer Plural? .* MSS 45 (Festgabe für Karl Hoffmann, Teil II), 1985, 151-164.
- F. B. J. KUIPER *vācārambhaṇam.* Indo-Iranian Journal 1, 1957, 155-159.
- A. METTE *Die Stotras des Kāraṇḍavyūha.* Bulletin d'études indiennes [BEI] 15, 1997[1999], 145-169.
- A. MINARD *La subordination dans la prose védique. Études sur le Śatapatha Brāhmaṇa.* (Annales de l'Université de Lyon; sér. 3. Lettres; fasc. 3). Paris 1936.
- F. M. MÜLLER, B. NANJIO (ed.) *Sukhāvati-vyūha. Description of Sukhāvati. The Land of Bliss.* Oxford 1883.
- P. A. MUMM *Altindisch sma.* Teil 1: Rig- und Atharvaveda. International Journal of Diachronic Linguistics and Linguistic Reconstruction [IJDL] 1 (2004) 19-68.
- 室寺義仁 *死の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承.* 密教文化 190, 1995, 112-101.
- *'bheda' についての仏教教義解釈—肉体の壊死から心身の分離死へ—.* 印度学仏教学研究 43-2, 1995, 914-910.
- H. NAKATANI *Metre and Euphony (Sandhi) in the Nilamata-Purāṇa. A Study of the Nilamata — Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir —*, edited

- by Y. Ikari, Institute for Research in Humanities, University of Kyoto 1994, 295-339.
- Th. OBERLIES Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Eine Studie ihrer Gotteslehre (Studien zu den „mittleren“ Upaniṣads I). Wiener Zeitschrift für die Kunde des Südasien [WZKS] 32, 1988, 35-62.
- Die Śvetāśvatara-Upaniṣad. Einleitung — Edition und Übersetzung von Adhyāya I (Studien... II — 1. Teil). WZKS 39, 1995, 61-102.
- Die Śvetāśvatara-Upaniṣad. Edition und Übersetzung von Adhyāya II-III (Studien... II — 2. Teil). WZKS 40, 1996, 123-160.
- Die Śvetāśvatara-Upaniṣad. Edition und Übersetzung von Adhyāya IV-VI (Studien... II — 3. Teil). WZKS 42, 1998, 77-138.
- H. OLDENBERG Zur Geschichte der Triṣṭubh. Nachrichten von der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Philologisch-historische Klasse aus dem Jahre 1915, 490-543 = Kl. Schr. 1216-1269.
- Kleine Schriften. Herausgegeben von K. L. Janert. 2 Teile. Wiesbaden 1967.
- R. PISCHEL Comparative Grammar of the Prakṛit Languages. Translated from the German by Subhadra Jhā. (1879), second ed., Delhi 1965.
- W. RAU Versuch einer deutschen Übersetzung der Śvetāśvatara-Upaniṣad. Asiatische Studien (Études asiatiques) 17, 1964, 25-46. = Kl. Schr. 1235-1256.
- Kleine Schriften. Herausg. von K. Klaus und J. F. Sprockhoff. 2 Teile. Wiesbaden 2013.
- L. RENOU Grammaire sanscrite. Tomes I et II réunis. Phonetique — composition — dérivation — le nom — le verbe — la phrase. Deuxième édition revue, corrigée et augmentée. Paris 1961.
- J. SAKAMOTO-GOTO Les stances en mātrāchandas dans le Jātaka pāli. Thèse pour le doctorat de 3ème cycle, Paris III, 1982 (未出版).
- Das Verbaladjektiv von *dhmā* im Mittelindischen. MSS 44 (Festgabe für Karl Hoffmann I), 1985, 171-189.

- *dṛś et paś* en Pāli. Dialectes dans les littératures indo-aryennes, éd. C. Caillat, 1989, 393-411.
- Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa. Jain Studies in Honour of Jozef Deleu, ed. by R. Smet and K. Watanabe, Tokyo 1993, 261-314.
- Zum präteritalen Optativ im Alt- und Mittellindischen. Zarathushtra entre l'Inde et Iran. Études indo-iraniennes et indo-européennes offertes à Jean Kellens à l'occasion de son 65^e anniversaire, ed. par É. Pirart et X. Tremblay. Wiesbaden 2009, 231-252.
- 阪本 (後藤) 純子 Sukhāvativyūha [梵文無量寿經] 歎仏偈 — 原典批判と訳 — [1] 序・第 1 偈。大阪市立大学文学部紀要『人文研究』48-8, 1996, 55-79.
- R. SALOMON A Linguistic Analysis of the Muṇḍaka Upaniṣad. WZKS 25, 1981, 91-105.
- SATYA VRAT The Rāmāyaṇa — A Linguistic Study. Delhi 1964.
- D. SCHLINGLOFF Ein buddhistisches Yogalehrbuch. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden, herausgegeben von H. Bechert, 7-7a. Veröffentlichung der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Institut für Orientforschung. Nr. 59, 62.) Berlin 1964-1966.
- Friedrich Otto SCHRADER (書評 :) Hauer, Jakob Wilhelm, Ein monotheistischer Traktat Altindiens. Gotha 1931. Orientalische Literaturzeitung 34, 1931, 884-887. = Kl. Schr. 168-170.
- Kleine Schriften. Mit Ergänzungen aus seinem Nachlaß herausgegeben von J. F. Sprockhoff. Wiesbaden 1983.
- D. SCHRAPEL Untersuchung der Partikel *iva* und anderer lexikalisch-syntaktischer Probleme der vedischen Prosa nebst zahlreichen Textemendationen und der kritischen Übersetzung von Jaiminiya-Brāhmaṇa 2, 371-373 (Gavāmayana I). Diss. Marburg 1970.
- Nilmadhav SEN A Comparative Study in Some Linguistic Aspects of the Different Recensions of the Rāmāyaṇa. JOIB 1, 1951-1952, 119-129.

- Harendra Chandra SILL A List of Verb Forms in the Critical Edition of the Ādiparvan of the Mahābhārata. *Indian Linguistics* 19, 1958 (Turner Jubilee Volume), 51-62.
- Helmer SMITH Saddaniti. *La grammaire palie d'Aggavaṃsa*. Vol. IV. Lund 1949.
- Les deux prosodies du vers bouddhique. *Kungl. Humanistiska Vetenskapssamfundets i Lund Årsberättelse 1949-1950* [1950], 1-43.
- *Retractationes rhythmicæ*. *Studia Orientalia* (Helsinki) 41:5, 1951, 3-37.
- R. Morton SMITH Thinking-Class Theism: The Śvetāśvatara Upaniṣad. *JOIB* 24, 1975, 317-337.
- R. SÖHNEN Zur Metrik der Kaṭha-Upaniṣad. *MSS* 44 (Festgabe für Karl Hoffmann I), 1985, 215-238.
- J. S. SPEIJER *Sanskrit Syntax*. Leiden 1886.
- O. SZEMERÉNYI (書評:) Burrow, T [homas]: *The problem of shwa in Sanskrit*. Oxford 1979. *Kratylos* 28, 1983 [1984], 67-77.
- E. TICHY *Vedisch éd. Funktion, Herkunft und subordinierende Transpositionen*. *Verba et Structurae*. Festschrift für Klaus Strunk zum 65. Geburtstag. Herausgegeben von H. Hettrich, W. Hock, P.-A. Mumm und N. Oettinger. Innsbruck 1995, 319-343.
- R. TSUCHIDA Some Remarks on the Text of the Śvetāśvatara-Upaniṣad. *印度学仏教学研究* 34-1 [67], 1985, 468-460 = (1)-(9).
- R. L. TURNER *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. Oxford 1962-1966.
- L. A. VAN DAALEN *Vālmiki's Sanskrit*. Leiden 1980.
- J. VARENNE *La Mahā Nārāyaṇa Upaniṣad. Édition critique, avec une traduction française, une étude, des notes, et en annexe, la Prāṇāgnihotra Upaniṣad*. 2 tomes. Paris 1960.
- J. WACKERNAGEL *Kleine Schriften*. Herausgegeben von der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen. 2 Bände. Göttingen 1955.

- J. WACKERNAGEL, A. DEBRUNNER *Altindische Grammatik*. I (1896), II,1 (1905), II, 2 (1954), III (1930), *Nachträge zu I, II,1* (1957). Göttingen. [AiG]
- A. K. WARDER *Pali Metre. A Contribution to the History of Indian Literature*. London 1967.
- W. D. WHITNEY *A Sanskrit Grammar, including both the Classical Language, and the Older Dialects, of Veda and Brahmana*. Leipzig 1889, 11th issue Cambridge, Mass. 1967 (先頭の冠詞 A を欠く).
- E. WINDISCH *Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*. Leipzig 1908.
- Ueber die Sandhiconsonanten des Pāli. *BKSGW* 45, 1893, 228-246. = *Kl. Schr.* 488-506.
- *Kleine Schriften*. Herausgegeben von K. Steiner und J. Gengnagel. Stuttgart 2001.

Summary

On the language of the Śvetāśvatara-Upaniṣad

Toshifumi Gotō

In 2000 (Vividharatnakaraṇḍaka. Festgabe für Prof. Mette. Swisttal-Odendorf, pp. 259-281), I published an article in German on the language of the Upaniṣads. The present paper discusses the same topic in Japanese hoping it will benefit my Japanese colleagues, especially those working in Buddhist studies. The article brings to their attention some common features of the language development which can be observed both in the Śvetāśvatara-Upaniṣad and some Buddhist texts. I examine special verbal forms (1., 2.), among them, the present forms used for past events (2.4.), and optative present for the past (also found in the Muṇḍaka-Upaniṣad) (2.5.), the adverb *tatvā* (3.), irregular case-forms and meter (4.), meter and phoneme (5.), including *tv* and *hy* (5.4.), and declensional irregularities (5.6.). The article contains detailed indexes providing information on the text occurrences and items dealt with, e.g., passages examined, verbal forms, other words, grammatical categories in general, categories of the verbs, phonemes, meters, references to Buddhist Hybrid Sanskrit and Pāli, etc.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*